

マダンロンパ～超高校級達の数列～

† AiSAY

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

希望ヶ峰学園にて行われる『コロシアイ』

15人の超高校級達の前に現れたのは、16番目の『超高校級の??????』  
今、彼にとって最悪の授業のチャイムが鳴る。

# 目次

第1問	入学『式』	—	1
第1問	入学『式』 解答編	—	9
第2問	①イキキル (非)	日常編	22
第2問	②イキキル (非)	日常編	26
第2問	③イキキル (非)	日常編	30
第2問	④イキキル (非)	日常編	39
第2問	⑤イキキル (非)	日常編	46
第2問	⑥イキキル (非)	日常編	53
第2問	⑦イキキル	非日常編	57
第2問	⑧イキキル	非日常編	63
第2問	⑨イキキル	非日常編	69

## 第1問 入学『式』

眩暈と頭痛を感じながらうつすらと目を開けた少年。彼、苗木誠の目に飛び込んできたのは

窓に打ち付けられた鉄板、天井から吊り下がった監視カメラ。

動揺しながらも、彼は視線を机の上に移すと、そこには入学案内のパンフレットが置かれている。

「……は……。」

『希望ヶ峰学園』

パンフレットにはそう書かれている

苗木誠は徐々にはあるが地震の状況を思い出していた。

本来ならば自分のような平凡な学生は入学が不可能な名門校『希望ヶ峰学園』に特例の『超高校級の幸運』として入学を認められ、不思議に思いながらも喜ぶ家族に家を出されたものの、校門をくぐってからの記憶がない。

ふと、教室にかけられた時計の針は8時を示している

パンフレットによると入学式が体育館であるようだ。苗木は急いで体育館に向かった。

苗木「とにかく、行ってみよう……」

自分に起きたこの異常事態の理由を気にしながらも苗木誠は教室を飛び出した。

教室を飛び出し、玄関ホールへ向かった苗木の目に飛び込んできたのは自分と同じであろう、超高校級の学生としてこの学園に入学した生徒だった。

玄関ホールには生徒が集まっていた

14人の超高校級達がそこにはいた……

大和田「おめーもこの新生か？」

威圧感ある声に疑問を投げかけられた苗木はたじろぎながらも返事をする

苗木「う、うん……」

声の主はその返事を聞くと、特に会話を続けることもなく腕を組んだ。

不二咲「大丈夫？顔が真っ青だけど？」

するも、次に呆然と立ちつくす苗木に心配するような声がかけられる

山田「しかし、これで15人ですか、キリがいいしこれで揃いましたかね」

それに続いて、特徴的な言葉遣いの声が聞こえる。

現状についていけず混乱する苗木を置き去りにして

既に集まった超高校級の面々は状況を整理する前にと

自己紹介を始める。

そこには普段テレビなどで注目されている者を始めそうそうたる面々がいた。

国民的アイドルグループでセンターマイクとして活躍する

超高校級のアイドル「舞園さやか」

高校野球大会の優勝チームの一人、エースで4番バッター

超高校級の野球選手「桑田怜恩」

社会現象を生み出すほどのベストセラーを叩きだした

天才的な小説家

超高校級の文学少女「腐川冬子」

学業を含めたあらゆる所で非の打ちどころがなく

何よりも規律を重んじる

超高校級の風紀委員「石丸清多夏」

高校生にしてカリスマ的人気を誇る同人作家

学校の文化祭で1万部の同人誌を完売させた伝説を誇る

超高校級の同人作家「山田一二三」

ファッション雑誌の読者モデルとして活躍し

カリスマ的な人気を誇る

超高校級のギャル「江ノ島盾子」

日本最大最凶の暴走族の二代目総長として君臨する

超高校級の暴走族「大和田紋土」

次々と大会新記録を塗り替え

オリンピック候補生にも選ばれた驚異の水泳選手

超高校級の水泳選手「朝日奈葵」

数々の革新的なプログラムを作った天才

超高校級のプログラマー「不二咲千尋」

極めて冷静沈着、必要最低限の事しかしゃべらない無口な彼女

超高校級の???「霧切響子」

本名を含め全ての素性が嘘のベールに包まれている

究極の裏ギャンブル「キングオブライアー」で優勝した経験もある

超高校級のギャンブラー「セレスティア・ルーデンベルク」

「3割の確率で必ず当たる占い」を売り物にしている新進気鋭の占い師

超高校級の占い師「葉隠康比呂」

アメリカの総合格闘技大会において女性ながら

チャンピオンになった女流武道家

超高校級の格闘家「大神さくら」

伝統ある家系、十神家の跡取りであり、

幼い頃から帝王学などを始めとした英才教育を叩き込まれた

超高校級の御曹司「十神白夜」

一通りの自己紹介が終わった後、状況の整理を各自が口々にしている

「キーン、コーン、カーン、コーン」

玄関ホールに学校のチャイム音が響き、声が聞こえた。

『マイクテスト、マイクテスト、

校内放送、校内放送』

神経の逆撫でするかのような、間抜けな声。全員が怪訝そうな顔を  
するが声の主は放送を続けた。

『大丈夫聞こえてるよね？』

えー、今から入学式をとり行うので至急体育館にお集まりくださ  
い』

全員は放送の指示に従い体育館へと向かった。

石丸「よし！これで全員揃ったな！」

??? 「あー全員集まった？それじゃあそろそろ始めよっか」

そう言っただけで放送と同じ声を上げながら教壇から出てきたのは…  
何とも形容しがたいモノだった。

不二咲「…ヌイグルミ？」

??? 「ヌイグルミじゃないよ！」

ボクはモノクマだよ！」

モノクマ「キミたちの…この学園の…学園長なのだ!!」

全員がその一部始終をみて硬直する。

モノクマ「よろしくね！」

それは場違いなほど明るい声…

それは場違いなほど能天気な振る舞い…

あまりにも場違いなその声に苗木は今まで感じたことのない恐ろ  
しさを感じていた。

山田「う…うわわわわ…

ヌイグルミが喋ったー!??!?!?!?!?!?!」

石丸「落ち着くんだ…ヌイグルミの中にスピーカーが仕込んである  
んだらう…!」

モノクマ「だからさあ…ヌイグルミじゃなくて…」

モノクマ「モノクマなんですけど！」

しかも、学園長なんですけど！」

山田「うわあああ！動いたあああ!!?」

大和田「落ち着けつつつてんだろ！」

ラジコンかなんかだ…」

モノクマ「ラジコンなんて子供のおもちゃと一緒にしないで。

深く深く、マリアナ海溝より深く傷つくよ…」

モノクマ「僕にはNASAも真つ青の遠隔操作システムが搭載されてて…

…なんて夢をデストロイさせるようなはなしをさせないで欲しいクママー!!?」

モノクマ「じゃあ進行も押ししてるんでさっさと始めちゃうナリよ」  
いまいち、キャラを保てていない目の前の物体に苗木達はただただ  
呆然とする。

モノクマ「ご静肅にご静肅に…

えーではでは…。起立！礼！

オマエラ、おはようございます！」

石丸「おはようございます!!?」

腐川「言わなくてもいいでしょ…」

モノクマ「では、これより記念すべき入学式を執り行いたいと思  
います！」

モノクマ「まず最初にオマエラの学園生活について一言…

オマエラのような才能ある高校生は世界の希望に他なりません。

そんな希望を保護するために…」

モノクマ「オマエラこの学園内だけで共同生活を送ってもらいま  
す！」

…は？

ただでさえ意味のわからないこの状況をさらに混乱させる言葉を



モノクマは発した。

しかし、やはりそんな彼らの反応など気にすることなく目の前の自称学園長は続ける。

モノクマ「ちなみに期限はありません！一生ここで暮らしてもらいます！みんな秩序を守って楽しい学園生活を過ごしてくださいね。」

舞園「ちよつと待つてください、いきなりそんなこと言われても…」

モノクマ「大丈夫！資金は豊富だからオマエラに不自由はさせないよ！」

桑田「ちよつと待てよ！そういうことじゃなくてな！」

江ノ島「えっ…嘘でしょ…？」

モノクマ「残念！嘘じゃないよ！その自信が僕にはある！」

まてよ…じゃああの鉄板は…

僕たちを閉じ込めるためのものだったのか!?!?

苗木はここに来る前に見た学園内の様子を思い出した。

大和田「おい、それ以上は冗談でもすませねえぞ」

モノクマ「別に冗談を言ったつもりはないけどねー」

モノクマ「まあけどね、無いわけじゃないんだよね、ここから出る方法」

腐川「えっ…？」

モノクマ「実は…学園長である僕は学園から出たい人の為にある特別なルールを設けたのですう！」

それが『卒業』というルール!!」

苗木（『卒業』?）

モノクマ「ではこのルールについて説明しましょう…簡単な話、誰かを殺せばいいんだよ！」

苗木（…こつ、殺す…ツ!?!?）

モノクマ「絞首、斬首、銃殺、釜茹で、溺死、電気、火炙り、生き

埋め、虐殺、石打ち、鋸、張り付け、

好きなのを選んでね♪」

楽しそうに言うモノクマがクルクルと踊る

モノクマ「とにかく！絶望するのは義務なんです！誰かを殺せば出られる、それだけだよ！」

苗木達は思考が追いつかずに、ただその場に立ち尽くしている。

モノクマ「うぷぷ、希望同士が殺しあうこんな絶望的なシチュレーションは…ドキドキする〜！」

桑田「殺し合って…なんだよ…」

モノクマ「はあ意味なら辞書で…」

朝比奈「意味について聞いて聞いてんじやないの！どうして私達が殺し合いないってしなきゃいけないの!?!」

山田「そうだー!!?!さっさと家に帰せー!!?!」

大和田「もういい、お前のおふぎけは度が過ぎた」

何人かがモノクマに声を荒げる中、大和田がモノクマへと近づく

モノクマ「おふぎけ？何のこと？君のそのトウモロコシみたいな髪型のこと？」

大和田「てめえ…ぶつ殺す!!?!」

そう言つて大和田はモノクマを掴みあげた。

大和田「ラジコンだかなんだか知らねえが、バツキバキに捻り潰してやんよ!!?!」

モノクマ「ぎゃー！学園長への暴力は校則違反だよー！」

大和田「うるせえ!!?!いいから俺らをここから出せ!!?!でなきゃ力づくでも…」

モノクマ「…………ピッ」

大和田「おい今更シカトかコラ!?!」

モノクマ「…………ピッ」

大和田「妙な機械音出してんじやねえぞコラ!?!」

霧切「危ない！投げて！」

大和田「はっ?」

霧切「いいから早く!」

大和田「は?!何だってんだ!!」

霧切の意図に気づかず、大和田はモノクマをそのまま潰そうとする霧切「くっ、間に合わない!」

どうにかして、大和田とモノクマを引き離そうと走り寄ろうとするが2人の間には距離があった。

すると、大和田の顔と掴まれているモノクマの間を何かが通り過ぎた。

大和田「ッ!何だ!」

それに驚いた大和田は後ろに飛び跳ね、その拍子に掴まれていたモノクマが手から離れ宙を舞う。

すると

ドツツツカーーーーン!!?!!?!!?

モノクマが大爆発を起こした。

???「いやいや…。危ないところだったね。」

一同が爆発に呆然とする中、体育館の入り口から声がした。

全員が声の方向に目を向けるとそこには近づいてくる人影があった。

ダークブラウンのスーツ姿。上着は手に抱え、ベスト姿でおりシヤツにはネクタイではなく赤いアスコットタイ。手には黒い手袋をしている男子生徒の姿があった。

一同があっけにとられる中、その人物は一度周りを見渡すと口を開いて言った。

???「おや、入学式は終わってしまったのかな?」

To be continue…

## 第1問 入学『式』 解答編

体育館には沈黙と煙が漂っていた

大和田「なんだよ…爆発しやがった…」

大和田の言葉に全員が今起きたことをぐちゃぐちゃになった頭の中で整理しようとしている。

スーツの生徒「うむ…あくまでペナルティとやらは規則を破った者にのみ与えられるのか…」

と、体育館に入ってきた男子が苗木たちの輪の中に近づきながら言う。

大和田「さっきのはテメエか？」

スーツの生徒「ん？」

大和田「とぼけんじやねえ！さっきの俺に向かって何か投げつけてきただろうが!!」

大和田はスーツ姿の男子に食ってかかろうとしたが、彼は片手で彼を制するジャスチャーをした

スーツの生徒「まあまあ、焦らないでもらえるかい？どうやら、まだ入学式は終わっていないようだ…」

不二咲「え？でも、爆発したってことはあのヌイグルミも壊れて…」

モノクマ「ヌイグルミじゃなくてモノクマだよ！」

山田「ぬあああー!!？また出たー!!？」

教壇から先ほど爆発したはずのモノクマが再び姿を現した

大和田「てめえ…本気で俺のこと殺そうとしたな…」

モノクマ「そりやそうだよ！殺されそうになったら殺すよ！

今回は見逃すけど次は無いよ！とここで…」

モノクマは振り返って新たに現れた男子の方を見た

モノクマ「やつと来たね!!今回は見逃すけど次に遅れてきたらペナルティだよ!!」

スーツの生徒「ん、以後気を付けよう」

苗木「君は？」

スーツの生徒「ん？私かい？おそらく私もキミ達同様ここの生徒だ  
と思うのだが、違うのかな？」

腐川「お、おそらくって？…」

スーツの生徒「いやはや、目覚めてみると教室で寝てしまっていた  
ようでね。だが、誰もいないようなので手当たり次第に人はいない  
かと彷徨っていたら、何やら体育館が騒がしいので、ここに来たとい  
うわけさ」

腐川「そ、そうじゃなくて、あ、アンタは誰って聞いてんのよ!!」  
全員が共通して思っていた疑問をぶつける腐川に対してその男子  
は困った顔をした。

スーツの男子「ん、誰と言われても…、申し訳ない。どうやら私  
は記憶が曖昧なようでね…、自分がどのような経歴の人間かわからな  
いのさ…」

苗木「記憶喪失ってこと？」

苗木の言葉にその場にいる霧切と十神、セレス以外が驚いた表情を  
した

スーツの男子「いやいや、記憶喪失といっても日常生活に支障をき  
たすほどではないようだから安心してくれ給え。」

当の本人はさも軽い怪我をしたかのように振舞っているが、周りか  
らしてみればそんな軽くは流すことはできなかつた。

そして、何よりも全員口には出さないが彼に対する第一印象は見事  
に一致していた。

『胡散臭い（なあ）（ですわね）…』

そう、どこからどう見ても彼の印象は胡散臭かつた。

身なりは素人目でもわかるような礼式的なスーツ姿ではあるもの  
の、そのキチンとした服装に似つかわしくない飄々とした態度と妙に  
年不相応な話し方が違和感を感じさせ、何とも言い難い雰囲気漂わ  
せていた。

モノクマ「そうだ、忘れるところだったよ。オマエラにこの電子生  
徒手帳を渡しておくね。」

校則とか地図とか色々書いてあるから、無くさないようにね」  
そう言うとモノクマは何処かに消えていった。

桑田「おいこれからどうすればいいんだよ……」

腐川「い、一生ここで暮らす？ いやよ……」

山田「今週のアニメがあゝ」

口々に不安や不満が漏れている

辺りに重苦しい空気が漂う

「殺人を行った者」だけが閉じ込められたこの空間から出ることができ

きる  
そのモノクマの言葉が全員を疑心暗鬼に陥らせている。

霧切「いつまでこうやって、お互いを牽制してるつもり？」

凜とした声が響き、全員が現実へと戻る。

生徒たちは、取り敢えず電子生徒手帳に記載された校則を確認する。

いまだ重い空気が漂うなか、恐る恐るモノクマから渡された生徒手帳を確認する。

画面上に浮かび上がる箇条書きの文書……おそらくこれが校則なのだろう

1

生徒達はこの学園内だけで共同生活を行いましょう。共同生活の期限はありません。

2

夜10時〜朝7時までを夜時間とします。夜時間は立ち入り禁止区域があるので注意しましょう。

3

就寝は寄宿舎エリアに設けられた個室でのみ可能です。他の部屋での故意の就寝は居眠りとみなし罰します。

4

希望ヶ峰学園について調べるのは自由です。特に行動に制限は課せられません。

5

学園長ことモノクマへの暴力を禁じます。監視カメラの破壊を禁じます。

6

仲間の誰かを殺したクロは卒業となりますが、自分がクロだと他の生徒に知られてはいけません。

7

なお、校則は順次増えていく場合があります。

大和田「ぎげんな！何が校則だ！そんなもん縛られてたまるかってんだ！

セレス「でしたら校則なんて気にせず行動してみたらいかがですか？私としても校則を破った場合どうなるのか知りたいところですし…」

山田「しかし…そんなことになれば大和田紋土殿は残機ゼロ状態に…」

大和田「ツ……。オレはな、ガキン頃から兄貴にしつけーくらいに言われて育ったんだ…」

男の約束は死んでも守れてよ…」

江ノ島「…で？」

大和田「俺にはまだ守りきれてねー約束があんだ…だからこんなところで死ぬ訳にやいかねえんだよ！」

セレス「よくわかりませんが、校則は守るということでよろしいのですね？」

大和田「あ、そうなるな」

静寂の中、再び声上がる

舞園「あの…ちよつといいですか…？」

霧切「何かしら、舞園さん？」

舞園「あ…あの、校則の6番の項目なんですけど…これってどういうことだと思えますか？」

6番の項目：仲間の誰かを殺したクロは卒業となりますが、自分が

クロだと他の生徒に知られてはいけません。

霧切「…他の生徒に知られてはならないってところかしら？」

舞園「そうです、そこが疑問になってて…」

十神「ふん！卒業したければ誰にも知られないように殺せつてことだろう」

腐川「なっなんでよ…どうして？」

十神「そんなことはどうでもいい、与えられたルールを守ればいいだけだ」

十神の言葉により、再び沈黙が訪れる

朝比奈「とりあえずさ、殺人とかバカげた話は置いてき、校則がわかったんだからそろそろ学園内を探索してみようよ！」

と、気を取り直すかのように朝比奈が声を上げると他の生徒達もそれに呼応する。

苗木「ここはどこなのか、脱出口はないのか、食糧や生活用品はあるのか：僕らには知らなければならぬことが山積みだ！」

桑田「うおっしやあ！早速みんな一緒に探索するぞー！」

十神「馬鹿馬鹿しい、俺は一人で行くぞ」

しかし、十神は一人で行動しようとする。

十神「他人を殺そうとする奴がいるかもしれないのに、一緒に行動なんてできるか！

俺は自分の思った通りに行動するぞ！」

しかし、体育館を出ようとする十神を大和田が引き止める。

大和田「テメエ、勝手な真似してんじやねえよ！」

ヒートアップする2人を止めようと苗木が入ろうとするが、大和田の矛先が苗木に変わり強烈な拳が彼の顔に向かう。

苗木は目をつぶった。

しかし、誰かに後ろに引つ張られたようで、予想していた衝撃が来ることはなかった。

何が起こったかと恐る恐る目を開けると…



そこには自分の肩を抱えていた例の男子生徒の姿があった。

苗木「あ、あの…」

スーツの男子「ん、ああ、すまない本来ならばこういう時は魅力的な異性が純真な行動に出て、君を助けるべきなのだろうが、状況が状況だからね。私で勘弁してくれ」

大和田「テメエ…」

スーツの生徒「まあ、そう熱くならないでくれ。」

そう言つて、苗木を助ける際に落ちたのであろうスーツの上着を拾いながら、彼は大和田に近づいて言った。

スーツの生徒「君がチームとしての団結力を大切にしている人間だということはわかる。そうやって、苦難を乗り越えてきたのだろうか？ そんな超高校級の暴走族である君がこのような状況において、独断行動をしようとしているメガネの彼に対して激昂するのは理解できる。」

大和田の肩に手を置く生徒

そして、そのまま今度は十神に方を向いた。

スーツの生徒「そして、同様に超高校級の御曹司である君が独断で行動に出ようとするのも、また私には理解できる。」

彼は今度は十神の方を見る

スーツの生徒「君は基本的に直面している問題に対しては、1人で取り組むべきと考えているのだろうか？ 他人が協力することを否定はしないが、自分はその必要はなく、そうあつてはいけない。自らは一人で全てを為す強者でなくてはならず、そして同時に自分はそれが可能な人間であるという自覚もある。少なくとも今まではそうやって自身に降りかかってきた困難を打開してきたはずだ。」

十神はフンと鼻を鳴らすとそのままその場にとどまった。

スーツの生徒「さて…、とは言つたものの大丈夫だろう…。おそらく、この学園内で行われるであろう殺人は言いたくはないが、我々の中で行われるものだけだ。彼が1人であっても、その他の我々が何人かのグループに分かれて探索すれば少なくとも殺人を実行する者はいないだろう。落ち着いたところで、探索に行こうじゃないか?!」

彼の言葉を聞き、全員がこの後誰とともに何処を調査するかを決めようとした。

しかし

霧切「待ちなさい」

その言葉に全員が霧切に注目する。

しかし、彼女の目は一人だけを射抜いていた。

霧切「いい加減、あなたは一体誰なのかしら？」

スーツの生徒「どうということかな？」

霧切の視線を気にした風もなく質問し返す男

朝比奈「でも、この人は記憶喪失だって…」

霧切「ええ、それが本当ならね」

葉隠「どうということだべ？」

霧切「私達はお互いに自己紹介はしたけれど、その場に彼はいなかった…。」

霧切が彼に近づく、それに対し彼は動揺した様子もなく傾聴している。

霧切「にも関わらず、彼は大和田君と十神君のことについて知っていた。それも彼らの超高校級の才能についてもね…」

桑田「それが何だつてんだよ…。俺たちはそれこそ全員が超高校級だぜ？多少の差はあってもそれなりに名が通ってるんだから、別にコイツが知っててもおかしくねえだろ？もつとも、そうじゃねえヤツもいるみたいだけど…」

そう言つて苗木を見る桑田。

当の本人は何も言い返せずに居心地の悪そうな顔をしている。

霧切「けれど、彼は記憶喪失なのよ。であるならば何故彼は彼らのことを知っていたのかしら？」

朝比奈「な、何故つて…」

セレス「彼が嘘をついているということですか？」

セレスの言葉にその場の全員が黙り、その視線の全てが彼に向けられる

霧切「ええ、そして…もしそうなら何故彼はそのような嘘をつく必

要があるのか？」

スーツの生徒「つまり、何が言いたいのかね？」

彼が身体を霧切に向ける。

その表情は特に追い詰められた風もなく笑顔だった

霧切「あなた、さっきのモノクマっていうのと何か関わりがあるじゃないの？」

霧切の言葉に全員が息を飲む

すると、彼は息を吐いて言った

スーツの生徒「なるほど…。確かにお嬢さんの言う通りなら、私は非常に怪しく、危険な男だろう。私がキミの立場でも、そう思うだろう…。」

腐川「じ、じゃあ…、や、やっぱりアンタ…。」

スーツの生徒「だが…、その質問に対して私が出す答えは変わらない」

石丸「じゃあ、君は本当に記憶がないと言うのだな！。」

苗木「じゃあ何で2人のことを？」

スーツの生徒「うむ、諸君らの疑問は2つ。①わたしは本当に記憶喪失なのか？②記憶喪失ならば何故2人のことを知っていたのか？」

彼は身を翻して、全員の顔を見る

そして、まるで舞台上の役者のように仰々しく語った

スーツの生徒「①の質問に関して諸君らを納得させる弁明はできない、それこそ信じてもらうしかないだろう。だが、②に関しては簡単だ…。」

彼の言葉に再び全員が彼を見つめる。

その視線の中には厳しいものもある。

スーツの生徒「見ていたのだよ」

十神「見ていただと？」

スーツの生徒「いや、正確には観察とそれに基づいた計算といったほうがいいかな。」

苗木「が、観察と計算？」

スーツの生徒「うむ、第1にここ希望ヶ峰学園にいる限り全員が超

高校級の才能に恵まれた人間であることは確かだ。それこそ、そのパンクな格好をした彼が言っていたように多少の認知度の差はあれどね…。」

彼に見られた桑田がギョツとする

スーツの生徒「では、次にそんな諸君らは各々、如何なる超高校級であるか？それを導くために必要だったのは第1に服装だよ」

江ノ島「服装？」

スーツの生徒「その通り。大和田君の方は見たがほとんど物語っているため難しくない。その気合の入ったヘアースタイルに足元まで届いた長い学生服。後ろには『暮威慈畏大亜紋土（クレイジーダイアモンド）』と書かれた当て字の刺繍。ここまでで彼はいわゆる不良学生という事が解る。一方で十神君は大和田君とは正反対といつてもいいほど身なりを正している。しかも、身につけているもののどれも超一流の品々だ。それこそ、彼のために仕立てられたと思われる寸分の狂いもない代物だ。そして、それを違和感なく着こなしている。おそらく、彼は常にそういった格好をしていると考えられるため、上流階級の出自であることは明らかだ。しかし、今言ったようなことだけでは、ここまででは彼らが「暴走族」そして「御曹司」である事までは分からない。」

朝比奈「じゃあ、何で？」

スーツの生徒「それは先ほどの諸君らの会話だよ。スイマーのお嬢さん」

彼の言葉に質問した自らの才能を見抜かれた朝比奈は驚く

スーツの生徒「今言ったように服装で彼ら2人の大体の素性はわかるが、やはり細かいところまでは結論は出せない。それこそ、ここまでは大和田君は超高校級の不良、十神君は超高校級のお金持ちやセレブかもしれない。ならば、より答えに近づく為には空欄をうめる必要がある。そうすれば解は出やすいからね。」

舞園「それがさっきの会話ですか？」

スーツの生徒「そうとも。先ほどの2人の諍いの原因は大和田君が輪を乱そうとした十神君の行動に対するものだった。であるならば、

彼は不良であつても常に集団での結束に重きを置いている人物ということになる。それも集団のトップとしてね。そして、十神君は集団ではなく自分自身の個人としての行動をすることが重要と考えている。自分はそうしなればならいし、それができて初めて自分であることを認識できるかのように。そして、彼の言動の端端には自分以外に対してやや上から目線だ。言葉を選ばなくて申し訳ないが、十神君、君には選民主義的な思想が見える。」

十神「ふん！当たり前だ十神家の当主たる者は常に選ばれた人間でなければならぬ。そこいらの平凡な人間と一緒にするな！」

スーツの生徒「おっと、やはりそうか……。では、私は間違っていないかっただようだ。」

十神の言葉にククツと喉で笑う男子

スーツの生徒「ならば君は自分のあるべき姿というものに対して何かしらの指針があるのだろう。そして、それは自らが見つけた理想像というものというよりはもっと周りからのプレッシャーを感じるような義務的な要素を内包するものだ。ならば先ほどの服装の件と合わせて考えてみるに、君は超高校級の御曹司ということで間違いないだろう。」

どうかね？つといった風に彼は首をかしげる

十神は舌打ちをしつつ、背を向ける

霧切「十神君のことはそれで良いとしましょう。では、大和田君は先ほどの貴方の計算とやらでは確かに大和田君が不良で集団に属していることはわかつて『暴走族』というところまでは分からないはずよ？」

そう言つて、霧切は再び質問を重ねる

スーツの生徒「うむ確かに貴女の言う通りだ、だがそれも解るのだよ。言つただろう解に近づくためには空欄をうめる必要があると……」

山田「むく。つ、つまりどういふことですか？」

スーツの生徒「彼が暴走族であるというヒントが他にもあつたということさ。」

「セレス「ヒントですか？」

スーツの生徒「ええ、先ほど彼を諫める時に肩に触れたが。その時の彼の筋肉の発達具合を見てみたのだよ。」

大和田「ああ？それがどうしたってんだ？」

スーツの生徒「すると、肘から手にかけての筋肉よりま肩甲骨から上腕にかけての筋肉の張り具合が著しい。おそらく、日常的にその部位を動かしているからだだろう。よほど重いものを持ち上げているのだろう。そして、それ以上に下半身。腰から下にかけての筋肉は触らずとも見るからにそれ以上だ。そして、本人は意識していないのだから立っている時の足が外に向かっている、それこそガニ股とまではいかないまでもね。」

大和田はその言葉に反応して自身の身体を見る

スーツの生徒「そして、それらが日常的な習慣からもたらされる癖であるならば、不良でそうなるのはバイク、それも大型のものを起こして乗り回しているからではないからかね？ならば、君はおそらく『超高校級の暴走族』とうことになるのだから…」

如何かな？と大和田、そしてその場にいる全員に確認を求める

葉隠「す、すごいべ…」

石丸「なるほど、確かにキミの言う通りならば彼らのことを知っているように見えてしまっても違いはない!!すまない、僕は君を疑ってしまっただ!!何と詫びていいやら!!殴ってくれても構わない!!」

スーツの生徒「いやいや、わかってくれたのであれば何よりだよ。」

と、ヒラヒラと手を振る

苗木「どうかな？霧切さん、彼を信じてみてもいいんじゃないかな？」

苗木の言葉に霧切は顎に手を当てた

そして、ふうと息を吐くと

霧切「分かったわ、取り敢えずは信じましょう。ここでこうしててもしょうがないもの。でも、最後にひとつ教えてくれるかしら？」

スーツの生徒「何かね？」

霧切「確かに貴方の推理の通りなら2人が一体超高校級の何であるのかは予測できる。でも、それでも確実に100%、彼らの才能を言い当てる確証はなかった。もし、外れていたらどうしたのかしら？」すると、彼はキョトンとした顔で「なんだそんなことか」と言ってお口を開いた

スーツの生徒「そんなのは私が外して恥をかくだけじゃないか。もつとも、当たってしまったことで諸君らに入らぬ不安感を与えてしまったようだがね…」

霧切「貴方…。」

スーツの生徒「それに君は推理といったが、今のは推理ではないよ。言っただろう『計算』と、答えを求めるために空欄に情報を入れて式を解いたに過ぎない。代入した値が間違っていれば、解答も不正解となる。当たっていれば気持ちの良いものだから、間違ってしまうてもそれはそれで面白いものさ。」

その言葉に霧切はため息をつくとき、もう何も言うまいと口を閉じた。

江ノ島「まあ、よく分かんないけどさ。終わったんならさつさと探索に行かない？」

朝比奈「あ！そうだった!!行こう、行こう」

石丸「おお！そうだ！ではみんな!!出発しようではないか!!」

こうして、全員は体育館を出て校舎内の探索に向かおうとした。しかし、そこでまた男が声を上げる

スーツの生徒「おお！そうだった!!一つだけ諸君らに訂正しなければならぬことがある!!」

その言葉に全員が彼を見る

スーツの生徒「記憶喪失の為に私は自分のことが全くわからないと言ったがあれは嘘だった!」

桑田「は?!」

腐川「や、やっぱりアンタ!」

もう何度目だろうという緊張が走る

スーツの生徒「いや、正確には知らない間に嘘をついていたことに

なつてしまったということなのだがね…」

十神「いい加減にしろ！今度は何だ！」

スーツの生徒「名前さ」

苗木「名前？」

スーツの生徒「うむ、私の名前さ。どうやらこれだけは諸君らに教えることができるらしい」

朝比奈「らしい？」

スーツの生徒「ああ、先ほどのモノクマがくれた電子手帳に私の名前が書いてあった。」

そう言つて、姿勢を正して口を開く

スーツの生徒「改めまして、諸君。私の名前は守亜定爾（モリア・テイジ）、以後お見知り置きを…。もつともこの名を信じるか否かも諸君ら次第だがね…。」

うやうやしく礼をしたその男に苗木は先ほどまでの彼には感じなかった寒気を背中に感じた。

これは数字のお話

これは数学の問題

これは希望（+）と絶望（-）の数列。

そして、超高校級の授業

t o b e c o n t i n u e …



## 第2問 ①イキキル (非) 日常編

その後、学内の探索をすることになり、その後食堂に集合することとなった。

食堂にはまだ来ている者は居ない。どうやら、苗木達が一番乗りのようだ。

舞園「ところで、苗木君……」

苗木「ん、何？」

舞園「えっと、あのですね……自己紹介の続きになっちゃうんですけど。苗木君に確認したいことがあるんです」

苗木「……ボクに？」

そういつて舞園は口を開いた。

舞園「苗木君つて、ひよつとすると『六中』じゃないですか？……」

根黒六中の……二組の……」

苗木「そ、そうだけど」

舞園「やつぱり！私も同じ根黒六中だったんです！四組にいたんですけど、知ってます？」

苗木「うん知ってるよ。でも舞園さんが僕のこと知ってたなんて。」

その後、二人の話が続く。

すると、舞園が意を決したように言った。

舞園「私は『超高校級の助手』になっちゃお！」

と、その時だった。

守亜「おや？どうやら先客がいたようだ……」

二人が声の方を向くとそこには謎のスーツの生徒改めて守亜定爾がいた。

守亜「どうやら仲むつまじく青春の1頁を紡いでいたようだが……お邪魔だったかな？」

と肩をすくめながら、二人に近づいてくる。

そう言われ、二人は顔を赤らめ気まずい空気が流れる。

すると、

石丸「苗木さんと舞園さんと守亜くん！君達が一番乗りだったか

！」

守亜「いや、残念ながら私は二番目だよ。一等は彼らさ」

石丸が食堂に入ってきて、先に来ていた苗木達に感心したように笑いかけてくる。それからすぐ石丸に続いて他の面々も食堂に集まってきたが、霧切の姿はない。

話を聞くと、うやら廊下や教室の鉄板がビクともしないようだ。大神さくらや大和田の攻撃に耐えていたようで、物理的な脱出はかなわないと結論づけられた。

守亜「私は保健室にのだが、一通りの薬品は揃ってるみたいだよ。輸血も出来るみたいだね。」

山田「あとの問題は食料ですな」

守亜が治療用品の確認し、山田一二三が食料問題を深刻そうに話したとき……。

モノクマ「ダイジョーブ！食料は毎日自動で追加されるからね。安心してください！じゃ、そういうことで……」

唐突に現れたモノクマが食料について説明し、唐突に消えていった。

その後は遅刻してきた霧切が、希望ヶ峰学園の見取り図を持ってきて、この建物が希望ヶ峰学園の校舎であることを説明。

だが、葉隠康比呂はなおこの状況を学園の催しだと思っている発言をした。

守亜「それにしても、これで一つわかったことがあるネ」

セレス「ですわね」

腐川「あ、あんたら何言ってるの？な、何がわかったっていうのよ……！」

守亜「逃げ場のない密室に閉じ込められたと言うことが、紛れもない事実だという事サ」

その発言の内容とは裏腹に脳天気にも聞こえる声色に皆がただ黙り込んでいた。

守亜「……ま、そんなこと今はどうでも良いか？」

桑田「ど、どうでも良いって事たあねえだろ！」

守亜「そうかね？。モノクマのルールに従う気がないのなら、結局のところ他の道を探す必要があると思うのだが？例えば、真犯人なる人物を探すとか。」

『？』

「！？」

守亜の言葉に大半の者が首を傾げ、霧切だけがその言葉に過剰な反応を示し、頭を押さえて顔を顰めた。

そして、石丸が顎に手を当てながら言葉を発した。

石丸「つまり、守亜くんは今後下手なことがないように犯人を捕まえようと言うんだな。しかし、犯人とはモノクマがいるのではないか！」

守亜「ふむ、では君たちはモノクマという謎の生物の単独意志によつてこの状況が作り出されたというのかネ？」

朝比奈「それは…」

守亜「しかし、話し合いをするにはどうにも時間がないか…」

守亜がチラリと時計に目をやると、皆が同じ方に向く。もう間もなく夜時間が迫っていた。

そして、皆が席を立とうとした時、セレスが口を開いた。

セレス「その前に一つ提案があるのですが、夜時間に出歩き禁止のルールをもうけませんか？」

朝比奈「どうということ？」

セレス「夜時間に制限を設けるのです。夜になり怯える生活なんて耐えられませんもの」

その言葉に皆が黙る。

守亜「ふむ、口約束だが気休めにはなる。よし私は賛成だヨ。」

守亜の言葉に無言の肯定をする一同。セレスは満足そうに笑うと、食堂出口に向かった。

その場で今回の会議はお開きとなった。

その後、校舎内にて放送が流れる。

『えー、校内放送です。午後10時になりました。ただいまより夜

時間になります。間もなく食堂はドアをロックされますので、立ち入り禁止となります。では、良い夢を。おやすみなさい…』

t o b e c o n t i n u e . . .

## 第2問 ②イキキル (非) 日常編

2日目の朝が来た。

これからこの希望ヶ峰学園での監禁生活が始まるとなる気が張ってしまい、苗木はともではないが眠れなかった。

しかし、朝起きて部屋を出ると舞園とぼったり出会い、話を聞く内に彼女と一緒に護身用に使えるものを探しに行くこととなった。あまりめぼしいモノは見あたらず、苗木はショウウィンドウにあった模造刀だけを持って行った。

苗木「そういえば、おなかが空いたね?」

舞園「そうですね…。食堂の方に行ってみましょうか?」

そういつて、2人は食堂へと向かったのだが、どうやら先客がいたらしく、しかも何か賑わっていた。

何かあったのだろうかと、急いで駆けつくとそこには頭を抱えている葉隠と朝比奈、そして愉快そうに微笑んでいる守亜の姿があった。食堂のテーブルの上にはどこからもってきたのかトランプがばらまかれている。

何をやっているんだと思いつながらも、苗木は彼らに近づいた。舞園のその後についてくる。

守亜「おや、苗木クンに舞園クン。おはよう、今日も仲むつまじくてうらやましい限りだ!」

昨日と同様、2人を見てはからかう守亜に対して苗木はもはや何も反論することなく、目の前の状況について聞いた。

すると、どうやら守亜は今朝目が覚めてから、校内をもう一度散策がてら散歩してみたところ、メダルを見つけたのだという。そこにモノクマが現れ、そのコインはモノクマメダルというモノで、校内にあるガチャガチャを使用する際に使うものだそうので、試しに引いてみたところ、トランプが景品としてでてきたのだという。

折角だから、気晴らしに誰かとゲームでもしようかと思つたところ、食堂にいた朝比奈と大神、葉隠を誘つたと言う。しかし、いざ始めてみると守亜の圧勝だそうで、そのため葉隠と朝比奈は意気消沈し

ているというのが今の状況らしい。

葉隠「くっそ、いくら何でも強すぎだべ！」

朝比奈「う、さくらちゃん」

大神「泣くな、朝比奈よ。勝負とは時に残酷なものだ。」

と口々にする3人を見て、守亜は嬉しそうだ。

「どうやら、やっていたのはブラックジャックらしく、苗木は何故そこまで勝っているか不思議に思い聞いてみた。」

すると

守亜「いや、何ブラックジャックは確率さえ予想できれば8割は勝てるゲームだからね！」

「と言いつつ守亜を見て苗木たちは驚いた。

昨日の出来事から彼は頭がいいとは思っていたが、それにしてもこの状況は常軌を逸している。確かにブラックジャックは他のトランプゲームと比べて勝ち易いと聞いたことはあるが、そのためには52（あるいは+ジョーカー）という枚数を全て把握していなければならぬ。それこそ、自分の手札はもちろんのこと、場に捨てたカードと山札もだ。

それを軽々とやってのけたように言うなんて彼は…。

朝比奈「ねえねえ！もしかして守亜もセレスちゃんと同じ超高校級のギャンブラーなんじゃない！」

葉隠「あ！そうにちげえねえべ！じゃなかったら、ここまで俺たちが惨敗することがあるわけね」

確かに苗木も2人と同じように考えたが、だとしたら昨日の大和田と十神の才能を見抜いたことが説明できない。

本当に彼は何者なのか、未だつかめない守亜定爾の才能とその正体に深い疑問をもった。

因みに、別に超高校級のギャンブラーでなくても2人に勝つのは難しいことではないと思っただが、それは口に出さずにいた。

守亜「いや、私はギャンブラーではないだろう。確かに今は私が圧勝したが、それはあくまでもカードの確率を計算したに過ぎないよ。他のゲームなら勝てるか解らない。それこそ、スロットやダービー等

では勝てないだろう。予測という意味では他の人間よりも上手い  
くだろうがね。そういう意味ではセレス嬢は本物のギャンブラーサ。  
彼女はそういった技術に加えて、運を味方に付ける才能もあつてのあ  
の才能だろうからネ。」

と、守亜は散らばったカードを集めながら言った。

朝比奈「うーん、絶対そうだと思っただけだなあ。守亜の才能  
が解れば、もうちょっと皆も仲良くしてくれると思っただけだ。」

守亜「フフ、ありがとう朝比奈くん。だが、少なくともキミ達はこ  
うして私と時間をともにしてくれている。それだけでも私は嬉しい  
よ。」

と朝比奈の優しさに対して笑顔を見せる守亜。

苗木もまたそのやりとりを見て張っていた緊張が少しほどけたよ  
うな気がした。

葉隠「でも確かに守亜っちの才能が何か気になるべ?」

朝比奈「でしょ!?何かいい方法無いかな?」

大神「確かに、このままでは守亜も周りの者も落ち着かなかろ  
う・・・」

舞園「うーん…。そうですね…。」

と、その場にいる皆が悩む。

すると苗木が口を開いた。

苗木「じゃあさ、守亜君の得意なことを考えてみるところから始め  
てみるのはいかがかな?」

朝比奈「あ!それだ!苗木、ナイスアイデア!」

大神「うむ、確かに才能とは言い換えれば自が長所であるからな。」

葉隠「じゃあさ、守亜っちの得意なことってなんだべ?」

そう言われ、皆が考えを巡らす。

今、解っていることと言えは…。

先ほどのゲームでみせた、カードの全てを把握する記憶力。そし  
て、そこから確率を導き出す計算力。そして、昨日みせた記憶がなく、  
初対面にも関わらず他者の才能を当てた推理力、本人曰くあれは「計

算」らしいが・・・

苗木は1つの答えを導き出した。しかし、それは確実に違うと根拠のない否定が自分の中にあった。

すると朝比奈、自分が導き出した答えと同じ言葉を口にした。

朝比奈「ねえねえ！もしかして守亜つてさあ、探偵なんじゃない！」その言葉に反応し、全員が守亜の方を見る。

苗木もまた、その真偽を確かめるために真っ直ぐと守亜の顔を見つめた。

しかし、やはり何故か苗木には根拠のない確信があった。

彼は、守亜定爾は探偵などでは決してない。もっと別の卓越した才能を持った人間であると・・・

t o b e c o n t i n u e . . .



## 第2問 ③イキキル (非)

日常編

朝比奈「ねえねえ！もしかして守亜ってさあ、探偵なんじゃない！」  
朝比奈の声が食堂内に響く。

葉隠「お！確かに、その可能性はあるべ!!昨日の十神つちと大和田つちの正体も見破ったし！」

大神「うむ、守亜の観察眼は我も目を見張るものがある。あながち間違いではないのではないか？」

と、朝比奈の結論に湧く2人。

しかし、苗木だけは何故か浮かない顔をしていた。

その様子を見た舞園が苗木に声をかける。

舞園「どうかしましたか、苗木君？」

その声にハツとなり、苗木は再び守亜を見た。

すると、その本人と目が合い、思わずたじろいだが直ぐに我に返り、もう一度守亜の目を見て言った。

苗木「そうだね、守亜君ほどの人なら確かに超高校級の探偵だって言われても納得かもしれない。」

朝比奈「でしょでしょ!!」

と、自分の意見が皆に賛同されたのがよほど嬉しかったのか、満面に笑みで喜ぶ朝比奈。

だが、苗木は続けて守亜に聞いた。

苗木「それで…。どうかな？守亜君、僕たちの予想はこういう感じになったけど何か心当たりはあるかな？」

そう、言い守亜へと訪ねる苗木。

他の4人も同様にして彼の方へと視線を向ける。

しかし、当の本人はどこか訝しげな表情をしており、手を顎に当てている。

そして、ひとしきり悩んだ様子を見せると口を開いて言った。

守亜「いや、それだけはないだろう。まったく根拠はないが、何故かソレだけは断じてないと言い切れる。」

と、少しばかり大きな声で否定する彼を見て、朝比奈が言った。

朝比奈「ええ。だって、あんなに頭が良いんだよ！トランプも強いし、葉隠も言ってたけど昨日の推理もばっちりだったじゃない！」  
守亜「いやいや。だから、あれは推理ではないよ。あくまでも見て得た情報から計算したに過ぎない。何より、私自身があれを推理と感じて行っていないのだから。」

その言葉に一同が首を傾げる。

そして、その様子を見ながら守亜は続けて言った。

守亜「そもそも、探偵というのは既に出来上がった事柄を分析、見聞して推理することによって、自分が出した答えが真実かどうかにかかわる人種を指すものだ。」

葉隠「ん？じゃあさ、守亜たちは違うんだべか？」

守亜「ああ、そうとも！。私はどちらかというと自分で組み立てることに喜びを感じるからネ！もちろん、その組み立てたものが上手くいったかどうか確かめはするが、上手くいかなくてもそれはそれで面白いものサ!!答え合わせをするだけなんて、まったくもってつまらない！」

その言葉に納得はいかないものの、そこまで否定されては本当に違うのだろうかと同は探偵という線を捨てた。

すると、苗木が再び守亜に訊ねた。

苗木「じゃあ、守亜君自身は自分の才能ってなんだと思うのかな？」

守亜「うむ…。得てして、自分の才能が自分の望むもの、好ましいものであると直結して考えることは出来ないが…。」

と、守亜はしばし思考する。

そして、それが終わると一同を見て言った。

守亜「どうやら、私に関して言えば才能と愛しているものは直結しているらしい。私は数学を愛している。」

舞園「す、数学ですか？」

舞園同様、守亜の言葉を聞いた皆が固まる。

しかし、守亜自身はそんなこと気にすることなく続けた。

守亜「うむ！数学サ!!あれは非常に素晴らしい！数字と言うものには無限の可能性がある!!自らの計算によってあらゆる事が予測でき、それは同時に万物を支配することを意味する!!」

そのあまりのテンションの高さに一同は圧倒される。

まだ、たつた1日しか共に過ごしてはいないが、その姿は先ほどまでの彼の姿からは到底予想できるものではなかった。

守亜「そして、計算が狂い間違つたとしても、それは失敗ではなく新たな可能性を示しているのサ!!そして、私にはその能力とそれを愛せる情熱がある!!もしこの身に何か才能があるのであれば、それは数学に対する情熱と愛だろう！」

守亜の言葉が食堂に響きこだまする。

一同は依然と圧倒され呆然としたままだ。

そして、守亜は我に返ると、その様子を見てわざとらしく咳払いをしていった。

守亜「失礼、興奮しすぎたようダ…。だが、コレが今の私の偽りのない想いと自分自身に関する考察だ。こんな私を形容するならば、差し詰め私は超高校級の数学者とでもいったところだろう。」

苗木「超高校級の数学者…。」

苗木が守亜の言葉を反芻する。

葉隠「た、確かに今の感じじゃ守亜っちの数学に対する情熱は半端じゃねえべ…。」

大神「確かに、数学に対するそこまでの愛があるならば、昨日のことも今のことも納得ではあるな。」

朝比奈「ふへく。何かよく解らないけど凄いだねく。」

舞園「ちよつとびつくりしましたけど、守亜君がそこまで言うならそうなのかもしれませんね！」

と、それぞれの感想を述べる姿を見て、守亜は満足そうな笑顔を見せた。

守亜「うん！納得してくれたようで何よりだ！これからよろしく頼むよ、諸君!!」

そうして、その場は解散となったが、苗木だけは未だに言葉にでき

ない不安を抱えたままだった。

翌日

朝になり部屋のカメラを見つめる苗木。

希望ヶ峰学園での生活は慣れないが、少なくとも朝起きて知らない天井に疑問を持つことはなくなった。

未だ、モノクマが提案したコロシアイは起きてはいないが、それでも暗い疑心が自分の中に渦巻いているのが解る。

と、その時来客のインターホンが鳴り響く。

石丸「グツモニーンッだぞ、苗木くん！」

苗木「おはよう石丸君」

石丸「では、おじやまするぞ！」

苗木「ちよ、まつ！」

突然、部屋に入ってきた石丸にたじろぐ苗木

しかし、そんなことはどこ吹く風といったようにドカドカと部屋に入ってくる石丸。

苗木「ど、どうしたの石丸くん？」

石丸「いくら荒波に揉まれようとも、両足をしっかりと着けていれば倒れる事はない……君もそう思うだろ？」

苗木「……えつと、どういうこと？」

石丸「つまり！一人で荒波に耐えられないなら、支え合うために親睦を深めようってことだな、苗木くん！」

実に風紀委員らしい言い回しだなと思いつつも、あまりにも唐突なその言葉に圧倒される苗木。

石丸「そして、今日をその記念すべき最初の日にするのだッ！だから、すぐに食堂に集まってくれたまえ！」

苗木「わ、わかったよ」

石丸「では、僕はこれで失礼するぞ！他の皆にも知らせて回らねばならないのでな！」

そういつて、再びドカドカと部屋に出て行く石丸を苗木は呆然と見送った。

なえぎはため息をつきながら部屋を出て、食堂へ向かおうとする  
と、前方に見知ったスーツ姿の背中が見えた。

苗木「おはよう、守亜君。」

守亜「ん？おはよう、苗木くん！」

そう言つて、苗木の方を向き笑顔を見せ、挨拶を返す守亜。

自称超高校級の数学者であると、昨日結論が出た彼だが正直言つて  
苗木は彼が少し苦手だった。

飄々とした雰囲気とは裏腹に常に冷静さを失わないところや、先日  
見せた推理力（計算力）は非常に驚いたし、今後のことを考えれば頼  
もしいとさえ思う。

しかし、逆を言えばその能力が非常に恐ろしくもあつた。まるで自  
分の全てが見透かされているような感じがするのだ。

そのアンバランスさこそが苗木が理由もなく守亜に対して不安を  
抱いてしまう理由なのかもしれない。

そんなことを考える苗木を見て、守亜が口を開く。

守亜「苗木君、大丈夫かね？」

苗木「え!?う、うん！大丈夫だよ…。」

守亜「うむ…。なら、良いがね。無理は良くないヨ。」

と、本気で苗木を心配する守亜の姿に苗木はそれまで頭の中にあつ  
た考えを振り払い笑顔を見せて言った。

苗木「ありがとう。さ、早く食堂に行かないと！」

守亜「ん、そうだね！石丸クンを怒らせるのは避けたいからネ！」  
そう言つて、2人は食堂へと向かった。

食堂に集まったが、交わした会話ははつきり言つてまとまりがな  
かつた。

セレスと江ノ島が言い争いになったり、不二咲が黒幕の正体が  
『ジェノサイダー翔』ではと根拠のない推理をする。

また、朝日奈が監禁されてから時間がたっていることを理由に間も  
なく「助けが来る」のではと言つた。

ちなみに葉隠は未だにこの状況がドツキリであると考えており、脳

天気なことを述べている。

すると、そんな中

モノクマ「アハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!」

と、モノクマが高笑いと共にやってきた。

モノクマ「警察だつて? オマエラ『警察』にはどんな役割があるか知ってる?」

朝比奈「犯罪者を捕まえる」

モノクマ「そうじゃなくてさあ。アニメとか特撮でだよ」

守亜「うむ、引き立て役。必ず遅れてやってくるヒーローが来るまで市民を必死に守ってるが、その意気とは逆に残念ながら悪役の強さを引き立てることしか出来ないことが大抵だネ。正直言つて損な役回りだネ・・・」

モノクマ「ウプププ、さすが守亜君わかつてるじゃない!」

モノクマは蜂蜜の入った小瓶をひっくり返し飲み切ると全員を見渡して言った。

モノクマ「:ていうかさあ、そんなに出たいなら、殺しちゃえばいいじゃない!」

その言葉に全員が息をのみ押し黙る。

葉隠「アツハツハツハ!!」

朝比奈「笑うトコ?」

葉隠「徹底した芝居っぷりに感心してるんよ」

江ノ島「:アンタ、まだ言ってるの?」

葉隠の言葉に江ノ島が呆れたように言う。

そして、大和田がモノクマに向かって言う。

大和田「つーか何の用だあ!? 連続殺人鬼さんよお!」

モノクマ「:レンゾクサツジンキー? 変な名前! ドイツ人?」

大和田「オメエの正体はわかってんだよ...!」

モノクマ「無視無視...」

大和田「無視すんな、コラア!!」

モノクマ「はいはい、それでは話を戻して:」

大和田の怒声を無視して、モノクマが話を続ける。



その言葉にゾクリと、苗木の背に冷や汗が流れる。  
他の者達も息をのんで固まっている。

しかし、ふと目をそらすと一人だけ他とは違う反応を見せている人間がいた。

その人物はいつもと同じように冷静な表情をしているように見えるが、その目が僅かに可笑しそうに歪んでいるのを苗木は見逃さなかった。見間違いと思ひ、再び彼に目をやるとそこには普段と変わらない姿があった。

モノクマ「後の事が知りたければ、オマエラが自分達の手で突き止めるんだね。この学園に潜む謎、知りたければ好きにして。ボクは止めないよ」

そう言つてモノクマはどこかへと去つていった。

食堂に何度目かわからない沈黙が広がる。しかし、これまで以上に重い空気が全員にのしかかる。

すると守亜が口を開いて、その空気を壊した。

守亜「で、どうするのかね？」

腐川「ど、どうするって何をよ・・・」

守亜「いやなに、モノクマの言葉を信じるのであれば内容はどうあれ外部の様子を知ることが出来るわけだろう？」

そう言つて、1人食堂を出ようとする守亜

桑田「お、おいどこに行くんだよ？」

守亜「どこつて、モノクマの言う映像とやらを見に行くのサ。もつとも、あの物言いだと楽しいものではなさそうだが・・・」

舞園「あの、守亜君。ある場所がどこかわかるんですか？」

迷わず歩く守亜に、舞園が不思議そうな顔で尋ねてくる。

守亜「まあネ。いくらここが異常な空間とはいえ学校であることには変わらない。なら、映像が見られる場所なんて限られてる。」

舞園「……………あ、そうか！視聴覚室！」

守亜「正解だよ。で、キミ達はどうするのかな？」

朝比奈「ど、どうするつて？」

守亜は振り返つて、全員を見て言う。



守亜「忘れたのかい？モノクマは《動機》と言っていた。だとしたら、用意された映像とやらは我々に外へ出ることを促す内容のものである可能性が高い。そしてそれは…。」

その言葉に苗木はハツとなった。

そう、自分たちに外へ出させるようなもの。

もし、それに感化された人がいたら、その人がとるべき行動は…。

守亜「殺意をもって、行動を起こすしかない。何を見ても後悔しないことだ…。」

苗木が出した答えを守亜が淡々と答える。

その口調がむしろこれから起こり得る未来で起こることが現実であるように物語っているようで皆は息をのんだ。

しかし、このまま立ち止まることも出来ず、苗木達は守亜の後に続いて視聴覚室へと向かった。

t o b e c o n t i n u e . . .

## 第2問 ④イキキル (非) 日常編

苗木達が視聴覚室の扉を開けると、各々の名前が書かれたDVDが入っているダンボール箱を見つける。

そこには生徒それぞれの名前が書かれたDVDが入っていた。

苗木「これは・・・」

守亜「ふむ、ご丁寧にそれぞれ個別に映像を用意しているとは……」その後、一通り視聴覚室を確認し、生徒達は各自自分たちのDVDをもって席に着いた。

プレイヤーの電源が順次入り、皆が映像へと見入る。

時間が経った。

視聴覚室には沈黙とともに、何とも言い難い雰囲気が漂っている。

この空間に漂うソレになんと名付ければいいのか。いや、そんなことは決まっている。

モノクマが何度も言っていたではないか……

自分が望むのはただ一つ

――絶望であるとする――

苗木が画面から顔上げる、その表情は青ざめており、体も震えている。

周りの他の生徒達も同様の反応をしている。

すると、誰かがドタドタと慌てて視聴覚室を出て行った。

苗木はそれが舞園だと知ると、苗木もまた急いでその後を追って自身も視聴覚室を出た。

舞園の後を追った苗木はとある教室の前に立っていた。

すると、教室の前の扉が開く。苗木がその方を見るとそこから出てきたのは舞園ではなかった。

苗木「も、守亜君？」

守亜「む、苗木くんか？」

苗木「どうして守亜君が？」

守亜「いや、あの映像を見た後に考え事をしたくてね。皆も同じような内容を見ているのだと思いきつと外に出てこの教室に来たのだが、舞園くんがひどい顔で慌てて入ってきたのでね…。」

苗木「ツツ・・・。」

守亜の言葉を聞き顔を歪める苗木。

すると、守亜は苗木に近づき肩に手を置いて言った。

守亜「済まないが、彼女のことをお願いしても良いかね？」

苗木「え？」

守亜「どうやら、私では彼女の力にはなれないようだ・・・。」  
そう言つて、守亜は去つていった。

苗木はその姿を見送ると、深呼吸をして教室の中にはいる。

苗木「舞園さん」

舞園「・・・苗木、君・・・。」

苗木が俯いている舞園に呼びかけると、舞園は幽鬼のように蒼白くなつた顔を上げて苗木を見つめる。

舞園「・・・どうして…ですか・・・。」

苗木「・・・。」

舞園「どうして私達がこんな目に・・・！私達が、何をしたつて言うんですか！」

苗木「落ち着いて、舞園さん。助けはすぐ来るよ！」だから、ね？

落ち着いて。ボクが守るから」

舞園「苗木・・・君」

苗木「——ツ!？」

涙目の舞園を見て、苗木はそんな言葉しかかけることしかできなかった。

そして、そんな根拠のない言葉しかかけられない自分の非力さに唇をかんだ。

舞園「・・・約束してください。苗木君だけは、何があつてもずっと私の味方でいて・・・。」

苗木「何があつてもボクは舞園さんの味方だよ・・・。」

そして、苗木は舞園が落ち着くのを待つと部屋へと戻つていった。

苗木は今日のことを思い出し出していた。様々な思いが苗木の頭の中を駆け巡る。

すると、部屋のインターホンが鳴った。

今はもう間もなく夜時間、セレスの提案により、外出は禁止されていた時間はもうすぐだというのに。

(まさか、舞園さん!?)

そう思いながら、恐る恐るドアを開く。しかし、そこにいたのは苗木の予想を裏切った。

そこいたのは守亜定爾であった。

苗木「守亜君?」

守亜「こんな夜分にすまないね。中に入っても良いかね?」

苗木「う、うん:。」

そう言つて、部屋の中に入る守亜。

苗木はその姿を目で追う。

苗木「それでどうしたのかな?」

守亜「いや、何。昼のことについてお礼を言おうと思つてネ。」  
昼のこと。

その言葉を聞いて、苗木は再び教室での舞園の姿を思い出した。

守亜「超高校級の数学者等とのたまわったクセに女性ひとり慰められないとは・・・」

そう自虐的な笑顔を見せる。

その表情に嘘はなく、本当に舞園や苗木のことを気にしているように思えた。

苗木「いいよ、僕も大したこと出来なかったけど、何とか舞園さんも落ち着いたみたいだし・・・」

守亜「そうか、そういつてもらえると助かるよ。」

苗木「うん。」

守亜は安心した顔を見ると、再び口を開いた。

守亜「代わりと言つては何だが、キミに何か悩みがあるのであれば、力になろう!」

苗木「う、うん。じゃあ、少しだけ愚痴っていうか、弱音を聞いてもらっても良いかな？」

そう言って、苗木は自分が抱えている不安を語った。

守亜はただ苗木の話の話を聞くことに徹した。

何も解決しないが、それでもこれまで溜まっていた心の中にあるモヤモヤが晴れていくのを苗木は感じた。

苗木「このままどうなるのかな？」

苗木はもう何度目になるかもわからない質問をした。

すると、これまで聞くことのみだった守亜が口を開く。

守亜「フ、数学のことを話した時、私は言った。数学は計算によってあらゆることが予測でき、それは同時に万物を支配することを意味する。と・・・」

苗木「う、うん。」

守亜「今でもその考えは変わらないが・・・。しかし、現実はやはりテストの問題等とは違うな・・・。」

その真剣な表情で語る守亜を苗木は黙って聞いていた。

守亜「正直言って、この状況は常軌を逸している。しかし、内実はモノクマが設けたルールによって確立している。このコロシアイは絶対的だが、定められているのであれば、それ以上でも、それ以下でもない。大切なのはXと言う変数なのだよ。」

苗木「守亜君・・・」

守亜「この場合、このコロシアイという式におけるXとは何か。それを常に考える必要がある。そして、それは個人によって異なるだろう。ならば、せめて皆がXに同じものを入れれば、皆同じ解を出すことが出来るはずだ。」

苗木「同じ解・・・」

守亜「うむ、しかしそれは容易ではないだろう。なら、せめてキミだけは変わらないことだ。」

苗木は守亜の言葉の意味は分からなかったが、それでも彼が真摯に言っていることだけはわかった。

そして、ひとしきり話が終わると守亜は立ち上がり、部屋を出よう

とした。

すると、再び部屋のインターホンが鳴った。

今度は誰だろう。

そう思い、ドアを開けるとするとそこには今度こそ舞園さやかがドアの前に立っていた。

舞園は顔を蒼くして、まるで怯えるように周囲を見回し、中で話したいと言いだした。

断る理由もないので、苗木は舞園を自室に招いた。

舞園「あ、守亜君もいたんですね？」

守亜「おや、舞園くん。ここには私はお邪魔かな？」

舞園「いいえ、大丈夫です。」

苗木「それで、何があったの？」

苗木が話を聞こうとした。

舞園「ごめんなさい……ちよつと変な事があって……」

苗木「変な事？」

舞園「さつき……部屋で横になってたら……急に部屋のドアが、ガタガタと揺れ出して……」

その言葉に2人が驚く

舞園「誰かが無理矢理……ドアを開けようとしているみたいでした。……鍵をかけておいたんで、開きはしなかったんですけど……でも、その揺れは……どんどん酷くなって……私は怖くて、そのままじっとしていたんですけど……」

守亜「それで、どうなったのかネ？」

舞園「……しばらくしたら収まりました。後で、恐る恐るドアを開けて、確認してみたんですけど、誰もいませんでした……」

苗木「そう、無事でよかったですよ。ごめんね？『守る』なんて言っつて、そんな危ない目に遭つてるのに気づかなかつたなんて」

舞園「な、苗木君のせいじゃありませんよ！……みんなを疑うつて訳じゃないんですけど、でも……ちよつと心配で……もし夜時間の間も、あんなことがあったらどうしようつて……」

守亜「うむ、ではどうしようか？私と苗木くんで見張りでもしよう

か？」

舞園「そんな、悪いですよ………あの、じゃあ提案なんですけど、一晩だけ部屋を交換してもらえませんか？」

苗木「え？でもそれは……」

守亜「うむ、でもどうするのかな？苗木クンと私のどちらの部屋と交換しようか？」

苗木「え、守亜君!？」

守亜「苗木クン、もうすぐ夜時間だ……。舞園クンをこのままにして置くわけにもあるまい。」

苗木「う、うんそれで舞園さんが安心するなら、ボクは構わないよ……」

結局、本人の希望により舞園は苗木と部屋を交換する事となり、守亜も苗木の部屋から出て、自室へと帰って行った。

舞園「大変。夜時間になっちゃいましたね……」

苗木「じゃあ部屋は交換するって事で、ボクは舞園さんの部屋に行くよ………はい。ボクの部屋の鍵」

舞園「ありがとうございます。これ、私の部屋の鍵です」

お互いの鍵を交換して、苗木は舞園の部屋に向かい一夜を越すこととなった。

—————

翌日

苗木は起きると、自分が昨日舞園と部屋を交換したことを思い出した。

そして、身なりを整えて舞園のところへと向かった。

インターホンを押す。

しかし、返事はなく不思議に思った。

ふと、嫌な予感が苗木の頭の中を駆け巡る。

いそいで、鍵を使い部屋の中に入ると、そこにあるモノがあった……。

苗木「ウ、ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

が  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
腹部に包丁が刺さり、血塗れになっている舞園さやか  
の姿

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
:



## 第2問 ⑤イキキル (非) 日常編

苗木が目を覚ますと、心配そうに自分の顔を見下ろす朝比奈と不二咲の顔があった。

苗木「どこどこ?」

不二咲「体育館・・・」

朝比奈「苗木、部屋で気を失ってたんだよ・・・」

そう聞き、徐々に自分に起きたことを思い出してきた苗木はまだダルさが残る身体を起こした。

不二咲「大神さんが運んでくれたんだ。」

苗木「夢じゃ・・・ない・・・。」

そう言葉をもらし、苗木はハツとなり気絶する間に見たあの光景を思い出し、思わず声を上げた。

苗木「舞園さんは!?!」

その言葉にその場の空気が重くなり、ほとんどの生徒が顔を曇らせる。

すると、特に表情を変えていない十神が口を開いて言った。

十神「舞園さやかは死んだ。」

死んだ、その言葉によって苗木の頭が必死に拒否していた事実が奥底から引き上げられる。

苗木は息をのむと、その場から急いで立ち上がり走り出す。

しかし、すれ違いざまに石丸に腕をつかまれ、それ以上先へは進めなかった。

石丸「どこへ行く気だ!?!」

苗木「決まってるだろ!!舞園さんを!舞園さんを!」

石丸「待て!落ち着くんだ、苗木君!?!」

しかし、石丸の言葉も聞かず苗木はその手を振り払い舞園の元へ向かおうとする。

そんな苗木に再び十神が残酷な事実を投げかける。

十神「さんざん確かめたぞ、舞園さやかは確かに死んでいた。」

苗木「じゃあ、ここにおいて意味があるの・・・。こんな時に何で体

育館なんかが集まっているんだよ!!」

苗木は声を荒げながら言った。

すると、十神と同様冷静に腕を組んで壁にもたれていた霧切が苗木に向かつて反論する。

霧切「私達だってこんな場所にいることは本意じゃない。」

苗木「じゃあ、どうして・・・。」

その言葉に苗木はますます困惑した。

人が死んでいる、なのにその場に行かずに別の場所に居続ける理由がどこにあるのか。

すると、ずつとおどおどしていた腐川がこの状況を作り出したのはモノクマであることを説明した。

なかなか、食堂にこない苗木と舞園を心配した朝比奈、大神、不二咲が様子を見に行くところと気絶した苗木を見つけ、それを見た朝比奈が思わず声を上げたところに他の皆も駆けつけた。そして、荒らされている部屋をよく調べたところ、シャワー室にて舞園が死んでいるのを発見した。

それと同時にモノクマからの放送により全員が体育館に集まるよう言われたのだという。

石丸などは、抗議しようとしたらしいが霧切から今モノクマに反抗するのは危険と言われ、守亜からもこれ以上犠牲が出る前に一度全員が集まる必要があると言われたため、しようがなく体育館に集まったというのが今の状況だと。

それを聞いた、苗木が呟く。

苗木「舞園さんは、アイツに殺されたんだ!モノクマに!」

すると、体育館奥から声が響く。

モノクマ「違うよ、僕はそんなことしないよ!」

全員が声の方を向くと、そこには入学式の時と同様教壇の上に立つモノクマの姿があった。

モノクマ「あのね、ボクはこの学園生活の趣旨に反するようなことは決してしません!ボクってクマー1倍ルールにうるさいってサファリパークでも有名だったんだから。」

不二咲「じゃあ、他に誰が……。」

その言葉にモノクマはさぞ面白いものを見つけたという風に言った。

モノクマ「わかってるくせに。舞園さやかを殺したのは、オマエラの中の誰かじゃん！」

全員がモノクマの言葉により、お互いに顔を見合わせる。

しかし、そんなことはあるはずないと苗木はモノクマに言うが、モノクマは本人はきちんと言っていると言って、再び全員を見渡した。生徒達は皆、疑心暗鬼となり体育館内はパニックとなる。

すると、十神が声を上げ、場が静まるとモノクマを見て言った。

十神「おい、ならば殺人を行ったソイツは卒業できるのか？」

モノクマ「アップ、プツヒヤヒヤヒヤハ(\*≧m≦\*)。そんなの大甘だよ、デビル甘だよ、地獄甘だよ！むしろここからが本番だよ。」

苗木「本番……」

全員が何のことだと、身構える。

モノクマ「では、ここで卒業に関する補足ルールの説明を始めます！」

セレス「自分が殺人を犯したクロだと他の生徒に知られてはいけない。その点を言っておられるのでしょ？」

モノクマ「そう、ただ殺すだけじゃだめなの、他の生徒に知られないように殺さなければならぬの。」

モノクマの言葉に全員が啞然とする。

しかし、先ほどまでずっと黙っていた守亜だけは前に出てモノクマに言った。

守亜「つまり、クロに求められる殺人は完全犯罪出なければならぬ。そういうことかな？」

モノクマ「そう、それを査定するために殺人が起きた一定時間後に必ず学級裁判を開くことにします。」

苗木「学級裁判？」

そして、モノクマは学級裁判に関する説明を行った。

学級裁判により、生徒は殺人を行ったクロは誰かを議論しなければ

ならない。もしそのクロが正解であれば、クロだけがオシオキとなるが、もし外せばクロ以外の全員がオシオキされる。

オシオキとはすなわち処刑を意味するのだ。

そして、モノクマは最後にこう付け加える

モノクマ「つまり、裁判員制度つてヤツだよ！犯人を決めるのはオマエラだ！」

すると、江ノ島がモノクマに対して声を上げた。

江ノ島「ちよつと、あんたの言ってることむちやくちやじゃない！」  
そう言つて、一人と一匹が諍いを始める。

それはドンドン、激しくなり遂に江ノ島が目の前に立ったモノクマを踏みつける。

モノクマ「学園長ことモノクマへの暴力を禁ずる。校則違反だね……」

江ノ島「は？」

モノクマの言葉に江ノ島を含め全員が意味が分からずに、立ち尽す。

だが、霧切と何人かはその真意に気付く。

そして、急いで江ノ島のもとへと駆け寄る。

モノクマ「召喚魔法を発動する！助けて！グングニルの槍っ!!」  
しかし、完全には間に合わず、守亜が江ノ島の襟をつかみ後ろへと

引っ張るものの彼女の身体を床から現れた槍の何本かが貫く。

江ノ島「え、何でアタシが…。」

そう言つて、江ノ島が血を流しながら床に崩れ落ちる。

その様子を見た者は青くするが、霧切と守亜は彼女に近づいた。

朝比奈「え、江ノ島ちゃん!？」

苗木「な、何を!!」

モノクマ「言つたでしょ、学園長への暴力にはペナルティーだつて？  
？本当なら、関係のないところで死人は出したくないけど……。」

そう言いながら、モノクマは元の場所に戻る。

モノクマ「でも、これでボクが本気だつて解つたでしょ！ここから出たかったら、卒業するしかないの!!それが嫌なら一生ここで過ごす

ことだね！」

そう言つて、モノクマは再びどこかへといなくなつてしまった。残された者達は目の前で起きた出来事に頭が追いつかず、ただ顔をひきつらせている。

葉隠「え？これつてマジなんか？ドツキリじゃないんか？」

腐川「あ、あんたまだそんなこと言つてんの？」

不二咲「い、嫌だよう……。こんな……。」

そう口々に思つたことを言う面々をよそに、十神とセレスは至つて冷静だ。

十神「どちらにしろ、これで2人死んだ。これ以上、ここにいたくなければルールに従うほかあるまい。」

朝比奈「そんな、ヒドいよ！」

セレス「あら、私は言つたはずですわよ。ここで生きるためには順応するべきだと。」

そう言い合う、3人に対して守亜は江ノ島の身体を調べながら言つた。

守亜「盛り上がつているところ、悪いが死亡したのは今のところ1人だ。」

十神「何？」

守亜の言葉に十神が目を向ける。

他の皆にも聞こえたのか、全員が守亜の方を見る。

守亜「江ノ島くんはまだ死んでいない。どうやら、運良く致命傷は避けている。もっともこのままでは出血が酷いため確実に死ぬだろうがね……。」

苗木「ほ、本当！」

守亜「うむ、だから早く保健室に行きたいのだが良いかね？」

朝比奈「あ、なら私もついて行くよ！」

守亜「む、そうしてもらえると助かるよ。」

そう言つて、朝比奈と守亜は江ノ島を担いで体育館を出ていった。

その後、守亜以外の全員が体育館に残つた。

すると、各自の学生達の電子生徒手帳に新たな情報が提示された。

《モノクマ・ファイル》と名付けられたらそれには、舞園が殺害された現場が苗木の部屋であることが書かれていた。

全員が苗木を見る。

誰も何も言わなくても、苗木には全員が自分を疑っていることが解った。

苗木「そんな、僕じゃない……。僕は殺してないよ。」

十神「では何故、舞園の殺害現場がお前の部屋になっているんだ？」

苗木「それは、舞園さんと部屋を交換したんだ……。舞園さんが怯えていたから……。」

大和田「部屋を交換だあく。」

桑田「嘘くせえ……。」

他の生徒達も言葉にはしないが、同じようなことを思っているのだろう、苗木を見る目が厳しくなる。

苗木「皆、ボクを疑ってるの？」

十神「そうだ、お前を疑うのが当然だろう。」

十神の言葉が冷たく突き刺さる。

十神「違うというのなら証明して見せろ。」

苗木「そんな……。」

証明ならできる、何故なら部屋の交換の件を知っているのは、自分と舞園だけではない。

守亜もまた、あの場にいたのだから。

だが、その守亜は今、江ノ島の手当のために保健室にいる。

ここで、何かを言ったところで無闇に場を混乱させるだけだと思いい、苗木は口を噤んだ。

十神「さ、ゲームを始めるぞ。」

苗木「十神君!?!」

霧切「健闘を祈るわ。」

そう言っって、十神に続き霧切も体育館を出ていった。

他の生徒達もそれに続くように、苗木を置いて体育館を後にした。

(皆がボクを疑っている……。何とかしないと……。)

自分がクロであると疑われていること、そして自分がクロとなつて

しまえば全員がモノクマによって殺されてしまう。

その二つが頭の中を巡り、苗木は1人体育館の中で取り残されてしまった。

その状況に苗木は膝から崩れ落ちる。

—————《絶望》—————

何度もモノクマが繰り返し、言っていた言葉が頭を駆けめぐる。

まさに今の苗木の状況は《絶望》そのものだった。

すると、誰かが体育館に入ってくるのが聞こえた。だが、もう誰かを確認する気力はない。

しかし、足音はだんだん近づいてくる。

そして、足音が止むと頭上から声がかげられた。

守亜「おや、苗木くんだけかね？」

声が体育館に響く。

苗木が顔を上げるとそこには守亜が立っていた。

苗木「も、守亜君……。」

守亜「うむ……。」

守亜は当たりを見渡すと、全て解っているといった風な顔をして苗木に手を伸ばして言った。

守亜「さて、苗木くん。問題を解き明かしにいかうか。舞園クンの為にも、そしてキミの為にもネ……。」

そう言われ、苗木は守亜の手を取ると立ち上がり、体育館を出て行った。

t o b e c o n t i n u e d . . .

## 第2問 ⑥イキキル (非) 日常編

体育館から出てきた2人は、まずは現場である苗木の部屋へと向かった。

特に言葉のない雰囲気には耐えられなかった苗木が口を開いた。

苗木「ね、ねえ、守亜君は僕を疑ってないの？」

守亜「ん、何故かね？」

苗木の言葉に守亜が振り返る。

その顔はいつもと変わらないものであった。

苗木「え、何故って……」

守亜なら、もう学生手帳に記載されたモノクマファイルに目を通しているだろうし、普通に考えれば他の皆と同じように自分が舞園を殺したと考えるだろう。

しかし、目の前を歩く彼はそんなことかと言った風に答えた。

守亜「まず第一にキミの部屋に舞園クンがいたことに関して言えば、私も経緯を知っているからネ。」

苗木「それは、そうだけど……」

守亜「第2にキミが気絶していた件だ。まさか、自分で殺しておいてその死体を見て気絶する殺人者はいないだろう？もつとも、自分で気絶する方法はないわけではないがキミの身体にはそんな痕跡はなかった。」

あくまでも、冷静に分析する守亜の言葉は今の苗木にはありがたかった。

守亜「最後に、まだ少ない時間しか共にしていないが、キミがそんなことをする人間には見えないしネ。」

苗木「守亜君……」

そうしている間に、苗木の部屋へと着く。

守亜はドアノブに手をかけると苗木を見ずに言った。

守亜「それにキミがクロであるのなら、部屋の交換を知っていた私にも犯行は可能だからネ。」

そう言う、守亜の姿に何も言わず苗木は部屋に入った。



すると、部屋には霧切がいた。

守亜「おや、霧切くんもいたのか……。」

苗木「き、霧切さん。」

2人の声に霧切が振り返る。

霧切「あら、来たのね……。」

苗木「うん……。」

先ほどのこともあって、2人の間には嫌な空気が流れる。

しかし、守亜はそんなことは知らなかったため、1人シャワー室へと入る。

取り残された2人も特に会話をすることなく、それぞれ調査を進めた。

しばらく経ち、守亜が出てきた。

苗木「何かあった？」

守亜「うむ、確実なことは言えないが少なくともキミがクロではないことは証明できそうだ。」

その言葉に苗木が驚き、霧切も目を細めた。

守亜は次に机の方へと近づく。

苗木「も、守亜君。それって……。」

守亜「苗木くん、それは後で話すとして、すまないがトラッシュルームを見に行ってくれないかな？」

苗木「え？それは別に良いけど……。う、うん、解った。」

そう言って、苗木が部屋を出ようとする。

すると、守亜が慌てて一度苗木を引き止めた。

守亜「ああ、すまないがそれが終わったらコレを持って視聴覚室に行ってくれ。」

そう言って、守亜は苗木にDVDを手渡した。

そこには「舞園さやか」と書かれており、苗木はそれが何かすぐに解った。

苗木「守亜君、これは……。」

守亜「すまないが、それを私や他の人間が見るわけには言かない。だが、舞園くんもキミになら納得するだろう。」

苗木はその言葉に頷くと、部屋を出ていった。

その様子を見送ると、守亜は再び部屋を調べ始めた。

すると、その様子を見ていた霧切が守亜を見て、口を開いた。

霧切「随分と彼を気にかけるのね…。」

守亜「ん？」

と、調べる手を止めることなく守亜は霧切に答えた。

守亜「それは、キミもそうじゃないのかね？その手に持っているものはそのためのものだろうか？」

霧切「ッ！」

そう言われ、霧切は持っていたものを隠すように手を後ろに回す。

守亜はその様子を目で確認することなく、フッと笑うと、手を止めて霧切の方を向いた。

霧切の鋭い目が守亜を射抜く。

しかし、守亜はそんな彼女に対して肩をすくめて言った。

守亜「キミも別に苗木クンがクロとは考えていないのだろうか？」

霧切「さあ、私はただ真実を知りたいだけ。別に彼の為じゃないわ。」

そう言つて、腕を組む霧切。

守亜はそんな彼女を見ると笑顔を向けて言った。

守亜「なるほど、どうやらキミと私のあり方は似ているようできて真逆なようだ…。」

霧切「どういう意味かしら？」

守亜「別に深い意味はないサ。だが、この状況に関して言えばキミのような人間は心強いよ。」

2人の目が交錯し、その間に沈黙が流れる。

すると、チャイムが鳴りモノクマによる校内放送が流れた。

モノクマ「えー、ボクも疲れちゃったんでそろそろ始めますか。お待ちかねの学級裁判を！」

守亜は服装を整える。

霧切もまた、目線を天井へと向けた。

モノクマ「ではでは、学校エリア一階にある赤い扉にお入りください

い！」

放送を聞き終わると、守亜は再度霧切を見て言った。

守亜「さて、では始めるとするか……。」

霧切「いいえ、終わらせるわ……。」

そう言う霧切に笑顔で守亜が応えると、2人は指定された場所へと向かった。

遂に学級裁判が始まる。

しかし、この時霧切には一抹の不安があった。

それは、これから始まる学級裁判に対してではなく。

ましてや、この希望ヶ峰学園での生活でもない。

ただ目の前を歩く男の姿に霧切はただならぬ不安を感じていたのだ。

t o b e c o n t i n u e d …

## 第2問 ⑦イキキル 非日常編

モノクマによって指定された赤い扉の先はエレベーターになっており、生徒達が全員乗ると動き出した。

そして、再び扉が開くとそこには円状に並べられたら立ち台があった。

その装飾は学級裁判と言うだけあって、被告人が立つようなものになっっている。

苗木「ここが裁判所？」

苗木がそう呟く。

すると、奥にある垂れ幕が開かれる。

モノクマ「やあやあ、やつと来たね！どうコレって？いかにもな感じじゃない？」

大和田「悪趣味な空間だぜ！」

モノクマの言葉に大和田が吐き捨てるように言う。

すると、珍しく霧切がモノクマに尋ねた。

霧切「ちよつと良い、議論の前に聞いておきたいことがあるのだけれど、あれってどういうこと？」

そう言つて、彼女が指すのは席に立てかけられた舞園と江ノ島の写真であった。

白黒に撮影されたそれには大きく赤いバツじるしが書かれていた。

それに対してモノクマが答えた。

モノクマ「死んだからつて、仲間外れはカワイソウでしょ？」

守亜「なるほど、だがそれならキミはもつと可哀想なことをしていることになるネ。」

その言葉に全員が守亜を見る。

モノクマもまた彼の方に向き直った。

モノクマ「ん？どゆこと？」

守亜「何、舞園くんは確かに息を引き取ったが、江ノ島くんは生きてるからネ。」

その言葉に全員が驚き、一部の生徒からは安堵の声があがる。

モノクマ「ホントに？」

守亜「ああ、もつとも生きていけると言うだけで今後復帰するのは難しいだろうがね……。止血剤や包帯で応急処置程度のこととは保健室で出来たが、これ以上のことは、ここでは難しいだろう。」

モノクマ「あらら、残念……。でも、生きているのに回復が無理なんて、絶望的だね！ウププ、ホント絶望的に残念なコだよ〜！」

苗木「自分で殺そうとしておいて！」

モノクマ「そんな、ボクは悪くないよ！キッチンと言ったでしょ、それを守らない方が悪いんじゃないか!?!」

と、苗木の言葉に怒るモノクマ。

しかし、モノクマは何事もなかったように再び姿勢を正すと話を続けた。

モノクマ「ま、別に良いけどね！守亜君の言い方じゃ、あのコはもうダメみたいだし。しばらくはこの人数でやっていきまショーー！」

苗木「ツ……。」

そして、遂に学級裁判が行われた。

苗木「本当にこの中に犯人がいるのか……。」

モノクマ「当然です！それは間違いありません！」

と、苗木の言葉にサムズアップして答えるモノクマ。

石丸はどこその教員のように目をつむって挙手するように言うが、大和田によって一蹴される。

朝比奈「議論しろって言われても……。」

山田「何から話したのか？」

霧切「まずは犯行に使われた凶器について、検証を始めましょう。」  
朝比奈と山田の疑問に霧切が答える。

すると、石丸が口火を切った。

石丸「舞園君の腹部に刺さった包丁、間違いないアレが凶器だ！」

大和田「そんなの見りゃわかんだろう！」

石丸の言葉に再び大和田が突っ込む。

しかし、苗木はその言葉を重要であると思い、大和田に言った。

苗木「いや、大切なことだよ。誰かが厨房から包丁を持ち出したっ

てことだよ。」

朝比奈「じゃあ、厨房に出入りした人が犯人ってこと？」

桑田「つーかさ、結局のところ苗木が犯人なんだろう？」

朝比奈の言葉に桑田が興味なさそうに、考えもせず依然と苗木を犯人であると言う。

しかし、それに対して朝比奈が思い出したように言った。

朝比奈「ちよつと待って、包丁を持ち出したのは苗木じゃないよ？」

その言葉に全員が驚いた顔をする。

朝比奈は皆の反応にたじろぎながらも続けた。

朝比奈「私、昨日ずっとさくらちゃんと一緒に食堂にいたから……。」

セレス「失礼ですが、《さくらちゃん》とは？」

大神「我だ。」

世界が止まった……。

そして、その《さくらちゃん》が口を開く

大神「我は昨夜、朝比奈と一緒に紅茶を飲んでいた。」

大神の話によると、どうやら朝比奈は夜に1人でいるのが怖かったらしく、大神と一緒に行動していたという。

腐川「あ、あんたたちが共犯関係にあつて口裏を合わせていたら何とでも言えるわね！」

と、腐川がどもりながら朝比奈たちの言葉が嘘ではないかと指摘する。

すると、それまで口を挟むことの無かったモノクマが付け加えるように言った。

モノクマ「えー、共犯者がいたとしても卒業できるのは実行犯であるクロ一名のみです。」

十神「手帳にもそう書いてあるな。」

セレス「つまり、誰かを庇っても何の得もないということですね。」

さらに続けて、朝比奈の話を聞く

すると、厨房にてロイアルミルクティを入れていたところ、1人だけ昨夜厨房を訪れた人間がいた。

その人物とは他でもない、舞園さやか本人であったというのだ。

そして、彼女が厨房を出た後に包丁が一本無くなっていたことに気づいたと大神が語った。

苗木はそれは護身用のためだと言ったが

十神「だとしてもだ、舞園は自分で持ち出した包丁を奪われ、それで殺されたことになるな。」

と指摘され、納得せざるをえなかった。

十神はさらに続けて、まだ苗木の容疑が晴れたことにはならないとも付け加える。

その言葉に腐川と山田が再び疑いの目を苗木に向ける。

守亜「いや、それもまた早計ではないかね、諸君？」

と、守亜が口を開いた。

全員が驚き、守亜を見る。

十神「どういうことだ？」

守亜「苗木クンの部屋にて殺人が行われたのは事実だ。しかし、それは苗木クンと舞園クンが部屋を交換したためにある。」

桑田「は？何を言い出すかと思えば、そんなの苗木のデマカセだろ？」

しかし、守亜は首を横に振る。

守亜「だが、それを私だけは証明できる。何故なら、舞園クンが苗木クンの部屋を訪れた時、私もその場にいたのだから。」

十神「何!？」

石丸「本当か！」

守亜の言葉に全員が驚く。

が、霧切だけは努めて冷静に守亜を見ていた。

十神「何故、今まで黙っていた？」

守亜「何、キミたちが苗木クンを冷遇していた時、私は江ノ島クンを保健室につれて言ったのでね…。」

と、皮肉めいた笑顔で全員を見渡す。

その言葉に全員が居心地の悪そうな顔をする。

十神「では、お前ならば舞園が苗木の部屋にいることを知っていたわけだ？ならば、お前になら犯行は可能と言うことになるが？」

葉隠「そうだべ！」

腐川「じゃ、じゃああなたが犯人なんじゃないの！」

と、今度は守亜に疑いの目がかかった。

しかし、守亜はそんな疑いに笑顔で答える。

守亜「確かに、私なら犯行は可能だろう。だが部屋の交換と同時に鍵もかけられていたはずだ。荒らされていたのは部屋の中。扉の鍵には特に傷といった痕跡はなかったはずだが？」

と言い、自分の犯行について否定する守亜。

それに加えて、苗木が言った。

苗木「うん、鍵も交換したし。舞園さんも誰が来ても開けないって言うってたから……。」

すると、今度は霧切が口を開いた。

霧切「その他にも苗木君が犯人出ないという根拠はあるわ。」

大神「聞かせてくれ。」

そう大神に促され、霧切は推理を始めた。

霧切「現場の状況を思い出して、犯人はすんなりとシャワールームに入れたのかしら？」

セレス「どういうことですか？」

苗木「僕のシャワールームはドアノブが壊れてて……。」

山田「確かに壊れた形跡がありましたな。」

腐川「苗木が無理やりこじ開けて壊したんでしょ！無理やり！」

霧切「それが苗木君が犯人ではないと言える根拠。」

大和田「何言ってるんだ？壊すしかねーんだつたら壊すだろ？中から鍵をかけられてたんだからよ？」

その大和田の言葉に苗木が反応する。

そして、苗木の言葉が弾丸となり大和田の証言を打ち砕いた。

苗木「それは違うよ！シャワールームに鍵がかかるのって、女子の



部屋だけだったよね？」

大和田「あ、どういふことだよ？」

守亜「つまり、男子の部屋である現場にてドアをこじ開ける形跡があるのはおかしいということサ。何せ鍵がないのだから。」

と、大和田の疑問に苗木の代わりに答える守亜。

不二咲「じゃあ、どうして苗木君のシャワールームの鍵は開かなかったの？」

苗木「それは、ドアの立て付けが悪かったからなんだ。犯人はドアが開かないのは、中から鍵をかけられたせいだと勘違いしたんだ。だからこそ、ドアノブごと壊そうとしたんだ。」

霧切「苗木君が犯人なら、そんな面倒なことしなくてもドアを開けられたわ。」

腐川「じゃ、じゃあ苗木じゃないってこと？」

霧切の証言と苗木の推理により、苗木の犯行が否定され一同は押し黙った。

苗木は自らの身の潔癖を証明してくれた、霧切に笑顔を向ける。

苗木「霧切さん」

霧切「まだ終わってないは、安心しないで。」

守亜「そうとも、苗木くん。むしろ今から始まるのだよ。真の学級裁判が・・・。」

苗木は2人に言われると、気を取り直して正面を見た。

そうまだ何も始まっていない。

最初の学級裁判は今やつと振り出しに戻り、始まったのだ。

t o b e c o n t i n u e d …

## 第2問 ⑧イキキル 非日常編

振り出しに戻った学級裁判

そこにはこれまで以上に、不穏な雰囲気が漂っていた。

セレス「では犯人が別人だとしましょう。どうして犯人は男子の部屋なのにシャワールームに鍵がかかっていると勘違いしたのでしょうか？」

霧切「犯人はそこを完全に女子の部屋、舞園さやかの部屋だと思っていたからでしょうね。」

セレスの言葉に霧切が答える。

すると、その話を聞いた不二咲が続けて言った。

不二咲「じゃあ犯人って部屋の交換のことを知らなかった人ってこと？」

腐川「な、苗木と守亜以外全員じゃないの!？」

その推理に全員が慌てふためく。

苗木は自分の容疑が晴れたのも束の間、新たな混乱を招くこととなった学級裁判に焦った。

しかし、同様に疑いが晴れた守亜はそんなことは顔に出すことなく立っている。

苗木はそんな守亜はどこかこの状況を楽しんでいるようにも見えた。

大和田「じゃ、じゃあ誰が犯人なんだよ!」

葉隠「つーか、この状況ってやばくねえか?リアルな話、誰か何とかしてくれねえと・・・。」

セレス「どんな些細なことでもかまいませんわ。どなたか疑問に感じていないのですか?」

すると、朝比奈が口を開いて言った。

朝比奈「疑問ならあるよ!えっとね、そもそも犯人はどうやって苗木の部屋に入ったのかなって・・・。」

不二咲「ピッキング?」

石丸「いや、ドアにはピッキング防止加工があった!」

守亜「うむ、ではやはり私の犯行は不可能だね！」  
と、新たな疑問点が浮上する。

守亜はそれに対して、自分の犯行否定に念を押しした。  
すると、山田が意気揚々と意見を述べた。

彼によると、来訪者のフリをした犯人を舞園自身が部屋に招き入れたという。

しかし、苗木はコレを舞園が怯えていたことを理由に否定した。

苗木「そんな彼女がドアを開けるなんて考えられないよ……。」  
そう苗木は語った。

しかし、その考えは意外な人物によってヒビが入る。

守亜「それはどうかな？」

苗木「え、ど、どういうこと？守亜君だって舞園さんが怯えていたのは知っているだろ!？」

苗木は唯一あの時の舞園に会っている人間が否定の言葉を口にしたことに驚き、詰め寄った。

しかし、守亜はまじめな顔で苗木に答える。

守亜「確かに、あの夜に私は苗木クンと一緒に舞園クンに会っている。しかし、だからこそ考えてみて欲しい。」

苗木「か、考えるって何を？」

守亜「彼女は確か、部屋のドアを誰かが無理やり開けようとするため部屋を交換して欲しいと言った。だが本当にそうならば、危険を冒してまで部屋の交換のために部屋をでるかね？」

苗木「そ、それは……。」

守亜の言葉に苗木は言葉に詰まる。

しかし、守亜はそんな苗木に目を向けながらも続けた。

守亜「冷静に考えてみるべきだ。部屋に外に危険人物がいる、そんな状況下の中で外の様子を見て、その人物がいないと分かっても、外に出ることはまずしないはず。普通なら、そのまま朝がくるのを待つべきだ。しかし、彼女は危険と知りながらも部屋の外に出た。」

苗木「そ、それはもし部屋のドアが壊された時のために……。」

守亜「だとしても、部屋にはピッキング防止加工がある。もしドア

を壊そうとするならば相当の時間と労力がかかるはずだ。流石にそんなことすれば他の者も何か起きていと気付くだろう。」

苗木「じゃあ、どうして…。」  
困惑する苗木。

そんな苗木の疑問に守亜は残酷な事実を突きつける。

守亜「彼女が怯えていたこと自体が嘘だとしたら？」

苗木「何言ってるんだよ！そんなことある訳ないだろ！」

その守亜の言葉に苗木は拒否反応にも似た過剰な態度をとる。

すると、守亜は痛ましいものを見るような目を苗木に向け言った。

守亜「ここから先は私ではなく、彼女にお願いしよう。」

苗木「え？」

その視線の先にいたのは霧切だった。

霧切はポケットからあるモノを出すと苗木に見せる。

霧切「苗木君にとっては考えたくないことでしょう。でも、これを

見てもそう言える？」

そう言つて、霧切が見せたのは一枚の紙だった。

そこに書かれていたのは、次のような文である。

――

2人きりで話したいことがあります。

私の部屋にきてください。

部屋を間違えないように

ちゃんと部屋のネームプレート

を確認してくださいね。

舞園さやか

――

苗木「なんだ、ソレ…。」

霧切「筆圧を浮かび上がらせたの、そのメモ帳は苗木君の部屋のよ。

苗木君、それはあなたが書いたものかしら？」

苗木君「嫌、違うよ…。」

と、それは守亜が言っていたことが真実であることの証だった。

苗木はそれを手にとって、顔をしかめる。

霧切「でしようね。そのメモには《舞園》と読めるサインも書いてあるみたいだし。」

苗木「どうして彼女がこんなものを？」

霧切「彼女はそのメモを使って、誰かを部屋に呼び出したのでしようね…。」

その言葉に再び全員に驚きがおこる。

セレス「ですが、そのメモには《私の部屋にきてください。》と書いてあったのでしたわね？」

不二咲「それだと苗木君がいる舞園さんの部屋に行っちゃうんじゃない？」

霧切「いえ、犯人は必ず苗木君の部屋に行くわ。」

セレス「あら、どうしてですか？」

霧切「入れ替わっていたのは部屋の主だけではなくて、ネームプレートもよ。手帳の表示しか見てなかったら見落としていたわ。」

不二咲「じゃあ、そのメモで呼び出された人は…。」

十神「間違えることなく、舞園さやかがいる苗木の部屋を訪れることが出来るな。」

そう、全員が納得すると霧切は苗木に向かって質問をする。

苗木は未だ、突きつけられた事実顔をしたに付けていた。

霧切「プレートの入れ替え、誰がやったのかしら。もちろん、苗木君や守亜君でもないのよね？」

2人は首を縦に振る。

桑田「じゃ、じゃあ、誰がやったんつーんだよ？」

守亜「そんなの決まっているじゃないか？」

桑田「は？」

苗木「僕たち以外に部屋の交換を知ってるあの人。舞園さんだ…。」

その真実に全員が息をのむ。

そして、守亜は付け加えて言った。

守亜「もつとも私が行うことも考えられるが、だとしたらプレートを確認するように等とは書かないだろう。そもそも、その手紙がある

ことに矛盾が生じる。」

朝比奈「でも部屋の交換をした上で人を呼ぶなんて、何の意味があるの？」

十神「舞園は殺人を計画、犯行後にプレートを戻し、苗木に罪を被せようとしたのだろうな。」

朝比奈の疑問に十神が冷たく答える。

しかし、苗木はまだ認められないのか反論を試みるが十神に一蹴される。

そして、十神は舞園の犯行について続ける。

十神「舞園の計画の落ち度は、誘い出されたそのバカに反撃を許したことだ。」

葉隠「模擬刀の先制攻撃だべ！」

セレス「いえ、防御したのですわ。」

十神「鞘の傷は大方そんなところだろう。計画通りにいっていたら、何食わぬ顔で舞園がそこに立っていたはずだ。」

苗木「舞園さん、どうして…。」

もはや反論の余地もなく、苗木は呟いた。

そのこぼれた言葉にセレスが答える。

セレス「決まっていますわ。ここからの脱出するため、でしようね。」

十神「だが、振り返ちにあつて殺されてしまったのだから、世話はないな。」

十神の言葉に苗木が怒りを露わにする。

いくら殺人を計画したとはいえ、死んだ人間に向ける態度とは思えない彼の態度に苗木は吼えた。

しかし、十神はこれがこのコロシアイと言うゲームのルールだと言う。

苗木はそれでも、許せずに声を荒げる。

熱くなる、苗木に対し霧切が鶴の一声を放つ。

霧切「冷静になって。言い争っている場合じゃないわ。」

セレス「そうですね。まだ犯人も特定出来ていないのですから。」

十神「この中にいる誰かな・・・。」  
t o b e c o n t i n u e d . . .

## 第2問 ⑨イキキル 非日常編

舞園さやかが殺人を計画していた。

この事実を目の前にしてもなお、学級裁判は続いていく。  
いや、続けなくてはならない。

でなければ、腐川が今騒いでいるように全員が破滅してしまうのだから。

桑田「つか、犯人決めろって言ってもよ。もう新しい手がかりがないんだぜ？ どうしようもないだろ？」

苗木「それは違うよ！」

再び苗木の言葉の弾丸が放たれる。

桑田「な、何だよ！」

苗木「手がかりなら残ってる！ 舞園さんが残したダイイングメツセージだよ！」

桑田「だい？ 何だった？」

霧切「ダイイングメツセージ。舞園さんの背中の壁にあっただでしょう？」

霧切の発言により全員がシャワールームにあっただあるモノを思い出す。

葉隠「おお！ あれなんなんだべ？」

朝比奈「あの11037ってやつ？」

大和田「数字のことならその女とそこのヤローが詳しいんじゃないのか？ 超高校級のプログラマーと数学者何だろ？」

そうやって、大和田は不二咲と守亜の方を見た。

しかし、2人の表情は曇っている。

不二咲「それが全然なんだよね…。どうやってもこの数字列に意味を見いだせなくて…。」

守亜「私もだヨ。ピボナッチ数列や他の可能性を試してみたが特に関連性はなかった。」

それを聞き、苗木は犯行時の舞園の行動を頭の中でシミュレートした。



そして、守亜の言葉により苗木は一つの可能性を見いだす。

守亜「ならば、そもそもアレは数字ではないのかもしれないネ。」

苗木「ツ！そうか解ったぞ!!」

苗木の言葉により、全員が彼の方を見る。

苗木「あそこに書かれていたのは犯人の名前だよ！」

全員「ええ！」

苗木「あのダイイングメツセージを180・回転させれば見えてくるはずだ…。LEON…。」

そして、苗木はある人物を見ながら自分が導き出した真実を告げる。

他の全員も思い至ったのだろう彼らもまた苗木と同じ人物へと視線を向ける。

苗木「コレって、君の名前だよね…。桑田怜恩君…。」

場が静まりかえる。

全員が告げられたら名前を持ち主である桑田怜恩を見、本人はこの状況に飲み込まれていた。

大神「桑田、怜恩、」

桑田「待てよ！そんなのただのこじつけじゃねえか!!」

霧切「おそらく彼女は壁にもたれ掛かった態勢で背後の壁にメツセージを書いた。」

守亜「背を向けた状態で、普通に文字を書くのは難しい。負傷していたのであればなおさらだ。」

桑田の反論も霧切と守亜によって、霧散する。

苗木「そう、だからこそ正面から見ると180・ひっくり返った形になってしまったんだ。」

桑田「なんだよ、それ…。俺が犯人だあ、適当なこと言うんじゃねえって!!」

しかし、それでも桑田は自分ではないと食い下がる。

だが、それもまた虚しく苗木達によって新たな確証を生み出す手がかりにしかならなかった。

霧切「あなたが犯人ではないのなら、何故証拠を処分しようとした

の？」

桑田「はあ？」

その言葉に桑田だけでなく全員が驚きの声を上げる。

石丸「どういうことだ？」

苗木「は！それって、焼却炉に落ちていたワイシャツの燃えカスとガラス玉の破片のことだよな？じゃあ、守亜君はそれを僕に確かめさせるために？」

苗木が驚いた顔をして守亜を見ると守亜は肩をすくめるようなジェスチャーをして笑った。

山田「おお、確かにみましたぞ！」

葉隠「そういえば、俺の水晶玉を見ねえんだけど、ソレじゃねえよな？」

山田と葉隠れの言葉により、全てが揃った。

霧切「苗木君、どうやら見えてきたみたいね。全ての謎の答えが。」  
守亜「では、始めようか……。この問の解答を！」

苗木「うん、これが事件全容だよ！」

そう言って苗木はこの謎の全てを語り始めた。

苗木曰く

この事件の犯人は舞園さやかを殺害後、証拠隠滅に為に慌てて焼却炉へと向かった。

しかし、焼却炉にはシャツターが閉まっていたため近づくことが出来ずにいた。

そこで犯人は葉隠れが所有していたガラス玉を用いて、シャツター奥にある開閉ボタンを押した。

常人ではまず不可能な行為だが、犯人はそれが出来た何故ならばその人物は超高校級の野球選手だったからである。

シャツターが開き、証拠を隠滅することが出来た犯人は安心して、その場を後にした。

しかし、証拠であるワイシャツの一部が焼却炉から焼け落ちてしまい、決定的な証拠を残すこととなってしまったのだ。

そう語り、苗木は最後に犯人に確認する。

苗木「そうだよね、桑田怜恩君。」

霧切「どうなの桑田君、何か反論はある？」

霧切が犯行を白日の下にさらされた桑田を問いつめる。

しかし、桑田はフルフルと体を振るわせながら、大声で言った。

桑田「反論だあ。あるよ！あるに決まってる！アホンダラあ！！」

その剣幕に苗木を初めとしたほとんどの生徒が圧倒される。

桑田の顔に余裕はなく、彼は怒りにまかせて苗木達に言葉をぶちまける。

桑田「アホアホアホアホ。そんなもん認めねえぞ！！」

苗木「でも焼却炉のスイツチにガラス玉をぶつけられるのは、超高校級の野球選手である君だけなんだよ！」

苗木は圧倒されながらも桑田に犯行を認めさせようと怯まずに自分の推理を語る。

しかし、桑田は聞く耳など持たないと言ったように血走った目で苗木を罵倒する。

桑田「アホアホアホアホ、そんなの認めねえぞ！！だいたい当番の山田なら柵の中に入れるだろうが！！」

苗木「そもそも当番の山田君なら柵の中に入れるから、わざわざガラス玉をぶつける必要がないんだよ！」

桑田「アホアホアホアホ、つかガラス玉投げて証拠隠滅っていうのも結局状況証拠からの想像じゃねえか！」

苗木「そうだね、でも君が犯人だっていう証拠は他にもまだあるんだ！」

これだけ言っても、桑田はまだ自分が犯人だと認めない。

苗木は出来ることなら、まだ自供の余地がある段階で桑田に罪を認めて欲しかったが、もうそれは叶わなかった。

そして、苗木は決定的な証拠を桑田へと提示する。

苗木「シャワールームのドアノブはネジが外されていたけれど…。」

桑田「ソレがなんだってんだよ！」

苗木「犯人は―そのネジを外すときにどんな道具を使ったのかな!?!」

桑田「お前の推理なんて間違っているんだよ!このクソボケウソコたれえ!!!」

苗木「もし僕の考えが合ってるなら、その工具セットのドライバーには使用された痕跡があるはずなんだ。」

桑田「アホアホアホアホ!証拠がなけりゃ、ただのデッチ上げだ!そんなもん認めねーぞ!!」

最後の弾丸。

それが全てを終わらせる、この事件の決定打となると信じて。

苗木「これで証明するよ!」

桑田に向かって、言葉の弾丸が装填される。

そして苗木は桑田の姿を真っ直ぐに見据え、その弾丸を放った。

苗木「桑田君、君の工具セットを見せてもらえるかな?!」

そして、その弾丸は見事に桑田を撃ち貫いた。

桑田が頭を抱え、青ざめる。

苗木「桑田君の工具セットは使用されているはずだよ…。」

苗木のその人ことで、全てが終わった。

先ほどまでの傍若無人な態度はなく。青ざめた桑田の目にはうつすらと涙がにじんでいた。

十神「もし別の用途で使ったというなら、どこでどんな使い方をしたのか教えてもらおう。」

霧切「先に言っておくけど、なくしたなんて言い訳は無しよ。」

十神と霧切にも念を押され、そこにいた桑田の顔は青白くどころか真っ白なり歪んでいた。

桑田「あ、アポ?」

十神「どうやら反論はないようだな…。」

苗木「桑田君…。」

全員が悲痛な面もちで桑田を見ている。

すると、今まで黙って学級裁判を見ていたモノクマが喋り始めた。モノクマ「ウプププ、議論の結果が出たみたいですね。ではそろ

そろ投票タイムといきましようか！お前らお手元のスイッチで投票して下さ〜い。投票の結果、クロとなるのは誰か？その答えは!？」

モノクマの指示に従い、全員がそれぞれの表情でボタンを押した。モノクマ「ヒヤッホー。大正解!!。今回、舞園さやかさんを殺したのは桑田怜恩君でした！」

桑田「はい？」

モノクマの無慈悲な、しかし脳天気な口調による言葉は放心している桑田だけでなく、その場にいる全員に届いた。

朝比奈「桑田…。」

大和田「てめえ、どうしてこんなことしやがった!!」

2人の言葉に桑田がふるえながら答えた。

桑田「仕方ねえだろ…。俺だつて殺されそうになったんだ。だつたら、殺すしかなかったつーか…。オマエラだつて一歩間違えばこうなつてたんだあ!!」

そう言つて、桑田は崩れ落ち泣き出した。

しかし、やはりモノクマの言葉は残酷に桑田へと降り注ぐ。

モノクマ「はい！てなわけで、オマエラは見事クロを突き止めましたので、桑田怜恩君のオシオキを行いまーす！」

桑田「ちよ、ちよつと待てよ！俺は仕方なく殺したただけなんだつて！そうだ！正当防衛じゃね？俺は自分の身を護るために仕方なく！」  
モノクマ「アッププ、それじゃあ、さっさとオシオキを始めちゃうか！みんな待つてることだしね！」

桑田「待つてくれ！」

モノクマ「言い訳無用！秩序を乱したら罰を受ける。それが社会のルールでしょ？」

その言葉に桑田がこれ以上ないほどに取り乱す。

壁際へと走り出し、ここから出せと叫びわめく。

しかし、その行為も空しくどこからともなく現れた鎖に首を取られ、どこかへと連れて行かれた。

そして、裁判場の奥が開く。

そこには夕焼けをバックにした野球場があり、桑田はマウンドの真

ん中に張り付けとなっていた。

その反対側には桑田に向かって向けられたらピッチングマシンがあり、モノクマの合図と共に無数の硬式のボールが彼に向かって猛スピードで放たれる。

そして、全てが終わると苗木達の前の金網が開く。

一部始終を見ていた苗木達の前に現れたのは、オレンジ色に染まったマウンドとその中央で血だらけになり絶命していた桑田怜恩の姿があった。

辺りには、彼の血で汚れたボールが無造作に転がっているだけだった。

モノクマ「ヤッホー！エクストリーム!!アドレナリンに染みわたるー!!」

目の前の出来事に言葉を失っている苗木達とは対照的にうれしそうに声を上げるモノクマ

そして、そんな彼らにモノクマは言う。

モノクマ「これが嫌ならきつぱりと外の世界との関係を断ち切つて、ここでの一生を受け入れるんだね！ま！オマエラにそれが出来たらの話だけどね。」

苗木は震えていた。

桑田が死んだことに対してか、舞園が殺されたことに対してか、様々な感情が苗木の中を駆けめぐる。

すると、モノクマが苗木に向かって言った。

モノクマ「わかる。わかるよ、苗木君！」

苗木「わかるって、何がだよ…。」

モノクマ「自分を裏切った舞園さんに絶望しているんだね？」

その言葉に苗木は我を忘れるほどの怒りを感じ声を荒げた。

苗木「ふざけるな！全部、全部お前のせいじゃないか！」

そう言つてモノクマを掴みかかろうとするが、その行為は霧切によって遮られた。

苗木は霧切をみると彼女は言った。

霧切「今は止めておきなさい。本気で彼女の仇を討ちたいのなら

ね。」

守亜「霧切クンの言うとおりで。今、ここでキミが死んでは全てが無駄になる。」

そう言って、守亜も苗木の肩に手を置いて制した。

こうして、希望ヶ峰学園における最初の学級裁判は幕を閉じた。今日あったことに圧倒されたのか、今は全員が自室に籠もっている。

寄宿エリア、生徒達の自室がある廊下にて、ある2人は顔を合わせていた。

守亜「おや、霧切クン…。」

そう言って、守亜は目の前にいる女性とに声をかけた。声をかけられた霧切は声の方を向く。

2人が立っているのは、苗木の部屋の前だった。

守亜「こんな所でどうしたのかね？」

霧切「それはこっちのセリフなのだけれど、あなたこそどうしたのかしら？」

守亜はそう訪ねられ、苗木の部屋の扉と霧切の顔をみると後ろ向いて来た道を戻っていきこうとした。

霧切がそんな彼を引き留める。

霧切「あなたも何か彼に用があって気なのではないの？」

守亜「いや、そのつもりだったがキミがいるのならば私が会う必要はないだろう。」

そう言って歩き出す守亜

しかし、そんな彼に霧切は再び彼に声をかける。

霧切「どういう意味かしら？」

守亜「何、女性の気持ちの代弁は女性がするべきだ。私が伝えても彼は喜ばないだろう。」

霧切「そう…。最後に一つ良いかしら？」

何かネ、そう言っていると背中を向けていた守亜が振り返り、霧切を見る。

霧切「あなたはいったい何者？」

そう霧切が言うのと守亜はいつもと同じように笑顔を見せ彼女に言った。

守亜「謎は解き明かすのがキミの信条出はないのかネ？相手に答えを求めるなんて君らしくない。」

だから：

その男は言った

守亜「キミが解き明かしてくれたまえ、この謎も…。」

そう言つて、守亜は再び背を向けると今度ごと歩みを止めることなく去っていった。

霧切は彼の言葉を聞き、顔をしかめると気持ちを切り替え、苗木の部屋のインターホンを押した。

彼に自分の導き出した、彼女の、舞園さやか の 想い を 伝える ために。

t o b e c o n t i n u e d …